
死んだ少年は死ねない

かん太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んだ少年は死ねない

【Nコード】

N9274W

【作者名】

かん太

【あらすじ】

——突然ですが、君は死にました。ゲームオーバーってやつだね。そんなわけのわからない声が暗い世界で動けない少年の耳に聞こえる。まるでわけがわからない。さらにその声は新しい世界で生きていけばいい、なんてことを平然と言つてのけ、深い眠りに落ちた。いつもと変わらぬ朝に目を覚ましたのは自分の部屋。そこで平穩をこよなく愛する生活を送る高校生、新倉智之は異能者に襲われ、その命を落とす。

序

——人は生まれ、そして死ぬ。

人に限らず万物において生があれば死がある。

人においては下界に生まれ出前から死ぬもの、自ら死ぬもの、不幸に見舞われて死ぬもの、天寿を全うして死ぬものなど、死に方は多岐にわたる。

そう考えれば野生の生き物は単純明快。

生まれないか、若いうちに食われて死ぬか、老いてから食われて死ぬか。

人の世界も野生の世界同様単純であればどうだろう？

老いて死ぬか、殺されるか。

私はそう考えてみた。だが人間界はそれほど単純な世界ではないと思う。

ただわかったことといえば、生物が死すれば輪廻の輪に従って新たな生を授かる。輪廻転生の理。

試してみたい、輪廻からの離脱。

見てみたい、人生の一部始終。

殺すか殺されるかという生物本来の人生。

ならば試してみよう、一人の人間の人生で。

ちやうどいいところに冥土への旅路につこうとしている少年がいるじゃないか。

実験するのにはちやうど良い、ただの人間、普通の高校生——

——一人の男子高校生が不幸にも、トラックに撥ねられた。

野次馬の視線の先にガードレールを突き破り、壁に激突して止まっているトラック。

救助隊は二手に分かれて、任務を行っている。

ひと組はトラックの運転手の救助を、もうひと組はトラックの下にジャッキを入れ、下敷きになった人を救おうとする組だ。

「ありや助からねえぞ……」

「あんなスピードで突っ込まれたんじゃあ……」

野次馬からは、そんな絶望じみた言葉しか聞かれないほどの惨状。数十分前。ブレーキの利かなくなったトラックは急な坂を猛スピードで下り、歩いていた男子高校生をはね、壁に激突して止まった。壁にぶつかったキャabinは、まるでプレス機に掛けられたように押しつぶされている。

燃料が漏れていることが分かったと、より一層救助隊の声が荒々しくなり、周囲のヤジ馬を遠ざけ、作業を早める。

ようやく開いたキャabinのドアであった所から、ゆっくりと引っぱり出される肉塊。そう表現するしかないほど、ドライバーの体はつぶされ、救助隊員でさえ目をそらすほどの有様。

あわてて周囲をブルーシートで覆う警官。

一方、ようやく持ち上がった車体の下から、ひかれた男子高校生が引きずり出される。

トラック運転手とは対照的に、原形をすっかりとどめた体。だが口から、腹部から大量の血を流すその体から、誰が生きていると思うものだろうか。

「そんな、どうして……」

「なんであいつが、こんなことになってんだよ、おい」

野次馬の最前列。ひかれた男子生徒と同じ学校の制服を着た男女が、ブルーシートから垣間見えた彼を見た瞬間絶望に体を震わせ、女子生徒は膝から崩れ落ちた。

こうして一人の少年の人生は、不幸にも突如として終わりを告げる、はずだった。

——あれ、どうして真っ暗なんだ。

少年は暗い景色の中で目を覚ました。だが体がピクリとも動かな

い。

動かない。動かせない。まるで動かせる気がしない。

「ここは、どこなんだ」

声だけは出せることを確認すると、周りを見渡そうとする。

だが首どころか目も動かせない。真上を見るだけの眼には、やはり天井があるのかもわからない、どこまでも暗い空があつた。

「やあ、なんか平然としてそうでなにより」

どこからか聞こえる女性の声。聞き覚えもないし、その声の主を探そうにも首を動かせない。

ただ言えるのは、まるでその声はこの空間自体から聞こえるようだということ。

「突然ですが、君は死にました。ゲームオーバーってやつだね」

わけがわからない。

「俺が死んだって？ そんなわけない。こうして声を出してる」

「それは私が許しているから。私が許せば首を振ることも、体を動かすこともできる」

声の主はまるで、彼の体を支配してると言わんばかりの口調。

「まあ君は生前の記憶なんて、今ないだろ？ どうして死んだのか。まあ、生まれ変わる前にはその前の記憶をまとめて、来世の糧にするもんなんだよ。こんな風にね」

手をたたく音が響くと、その少年の記憶と思しき風景がまるで走馬灯のように次々と流れる。

生まれた瞬間の景色、両親と遊ぶ景色、小学校の入学式の景色、友達と遊んでいる景色。

すべて自分の見てきた視点で流れていくそれらは、見れば見るほど自分の記憶だと思いだしてゆく。

「ま、君は生まれ変わるわけじゃないから、こんなものを見ても仕方がない。それにこんなわけのわからないことをする必要も、ね」

再び手の叩く音とともに、流れていた記憶の走馬灯は消えて再び暗い天井に戻った。同時に今まで見てきた彼の記憶も消しとんだ。

「とにかく、君は死んだんだよ」

運がなかったね、と続いて嘲笑。ちやうつじやう

「……俺は、どうなるんだ？」

「とりあえず、新しい世界に送ってあげるよ。その世界で君は暮らしていくだけ。まあちよつと変わったコンテニューだけだね。というわけで、楽しんできてね」

まるでわけのわからない回答。それと同時に襲われる恐ろしいまでの睡魔。

彼の意識は、底知れぬ闇の世界へと落ちてゆく――

序（後書き）

読んでいただいた方、ありがとうございます。

久々の投稿になります。以前は雪華というPNでやっていました。

実はこの作品もその時に投稿したのを、新しく手直したものになります。

以前投稿してから5年ほど経ちました。多少は腕が上がったかと思いきや、まったく進歩がなくてわけのわからない文章になって軽くシヨックを受けてます（汗）

中途半端でやめてしまったこの作品、今度はちゃんと完走します。

どしどしご意見ご感想いただき腕を上げていきたいと思しますので、長い目で見ていただければ幸いです。

では本編でお会いしましょう。

第一話「死」

隙間から洩れる太陽光を顔に浴びて、少年は目を覚ました。ゆっくりと上半身を起こして、寝ぼけ眼で周囲を見渡す。

ベッドに寝ている自分、漫画が積まれた机、カーテンの合間から見える山と空。

別段、おかしい所のない自分の部屋。それを認識すると深く息を吐き、心を落ち着かせる。

いつも彼は起きるたびに周囲を確認する癖がある。それがなぜなのかは彼自身もよくわからない。それが終われば朝食作りにかかる。手早く朝食を作るとリビングに並べ、テレビのニュースを見ながら食事を始める。

「昨夜未明、神奈川県堀渚市《ほりたきし》で男性の遺体が発見されました。発見したのは近所に住む女性で、夜に河原を散歩していた際、橋の下に血を流して横たわる男性を発見。病院に運ばれましたが、死亡が確認され……」

朝っぱらから何と物騒な事件だろう。

しかし、さほど彼の興味をそそる話題ではないのか、味噌汁をすすってはご飯を口に運んでいる。

「警視庁は殺人事件として、『異能者』の犯行も視野に入れて慎重な捜査を進めていくとのことですよ」

ニュースキャスターが締めくくると、すぐに別の話題に切り替わる。

「異能者ねえ……」

自分たちよりも『身体能力がずば抜けている人々』というのが彼らの一般的な認識。だから少年もさほど気にとめないし、なぜ警察はそんなことで慎重になるのかと、そこだけが気にかかった。

彼にとっては所詮同じ人間なのだ。

食事が終わって手際よく食器を片づけると、かばんを持って家を

出る。

瞬間、まぶしい太陽の光と恐ろしいまでの熱気に、少年はたじろいでしまう。

マンシヨンの一角である自分の家のカギを閉めると、いつもの堤防沿いを歩き学校へ向かう。

波の音と潮の香りが、多少熱気を和らげてくれる。とはいえ高校生活最後の夏、こんなにうなだれることになるとは、まったくもってついていないと少年——新倉智之《にいくら　ともゆき》は思う。ありがたみのない太陽の恵みを浴び、汗だくになりながらもようやく学校に到着し、教室に入ると彼の体をひんやりとした空気が包み込んだ。

自分の席について一息つくと、ようやく火照りがとれた気がした。

「よっ！　智之い、今日もあっちいな」

朝っぱらから元気のいいやつだ……

そんな友人がとても疎ましかった。とはいえそれはいつものことで、すっかり接し方も理解してしまった。

「よう永太。お前は相変わらずハイテンション——《能天気》だな」

「おい！　今『ハイテンション』の意味にとっても失礼な言葉が混じってなかったか！？」

ズバツとキレのいいツツコミが入る。

「いいツツコミだ。だがネタとしてはまだまだだな」

もちろん裏はあるのだが、そんなことはないと言い捨てる。

「そ、そうか？　ならいいんだけどさ……」

どうも納得できていないような桜庭栄太《さくらば　えいた》だったが、気を取り直してニュースで流れていた殺人事件へ話題を進めた。

「隣の市だぜ？　マジ怖いつて」

「ん？　ああ、別に。巻き込まれなきゃいいんだしな」

あっさりと流された。しかも否定の方向で。

「うおい！　異能者だぜ！　俺らがかなうわけねえ相手だぞ？」

なぜこんなに永太はハイなのか、いつものこととはいえ、やはり疎ましい。

「あー、異能者怖い、異能者怖い」

「まんじゅうみてえな可愛いもんじゃねえつつの！」そんないつも通りの学業も終わり、まだ日の高い帰り道を暑さにうなだれながらマンションに到着する。

部屋に入るとすぐに冷房を入れ、涼しくなるのを待ってから夕食を作り始める。

彼には親がない。まだ小さい頃に事故で亡くした。そして独立してから家事全般を一人でこなせるようになった。彼が唯一周囲に誇れることだ。

手早く調理を終えた彼は、ニュースから昨日の続報と思われるニュースが流れ、テレビに目をやった。

「堀滝市での殺人事件の続報です。堀滝市の周辺を警察が検問していましたが、昨夜未明に何者かによって破られていたことが判明いたしました」 犯人は堀滝市の外に出たということか。

テーブルに料理を並べながらも、テレビからは目を離さない。口では気にしないといった智之だが、やはり誰かから話題に上れば、気にせざるを得ない心理が働く。

「犯人は県道に張られていた警察官5名ほどの検問を突破し、隣の月規市《つきのりし》に入ったとみて、捜査範囲を広げています」
「げっ、こっちに来やがった……」

そう、智之たちの住む月規市に犯人が入ったのだ。

「なお検問に勤めていた警察官は今朝、全員の死亡が確認されました。これを受けて警視庁は異能力特別捜査隊を出動させ、犯人逮捕に全力を挙げることにしています」

箸が止まった。そんな凶悪犯がこの町に入ってきたのだ。

月規市は広いとはいえ、ほとんどが山などで市街地は集中して二つあるだけ。

もし犯人が無差別に人を襲っているとすれば、当然遭遇する確率

は上がるわけで。

智之は心の底から遭遇しないことを祈った。この平穏な生活が続くことも含めて。

翌朝はあちらこちらが物々しい雰囲気にもまれていた。パトカーの往来が多く、警察官もよくみられる。本当に危ない場所になってしまったのだ。

「勘弁してくれよ、全く……」

深いため息をつきつつ、いつも通り堤防を歩く智之。すると背後から走ってくる足音が。

「ど、どいてください！」 振り向くと、その足音の主とぶつかるのはほぼ同時だった。

「ぐっ、うえっ！」

とつさに身構える智之だったが、なんという偶然か、その足音の主はぶつかる直前で躓き、智之の腹部に見事なタックルを食らわせたのだ。

「ご、ごごご、ごめんなさい！」

声の主であるかわいらしい女子生徒は、小さな頭を下げて心から謝った。

「い、いや、ごふつ。見事なタックルだったぜ？」

当然タックルなど食らわせるつもりはなかった女子生徒は、大きくくりつとした目を開き、耳まで真っ赤に染めてもう一度謝った。

「いや、けがしてなかったからいいって。そっちは大丈夫？」 「はい。その、あなたが下になってくれたので何とも……、あっ！」

と女子生徒は腕時計をみると、今度はおろおろと余計に取り乱し始めた。

「どうしたんだ？ なんか急ぎの用事でもあるのか？」

「あ、今日は私日直で、早く行かないといけないのに寝坊しちゃって！」

ドジっ子か、可愛いな。

なぜかほっこりとした顔をする智之は、よしと言って女子生徒の

手を取りたちあがらせると。

「走るぞ、ついてこいよ？」

「えっ、きゃっ！」

あくまで女子生徒が付いてこられるように気遣い、智之は走り始める。

堤防から市街地に入り、神社の脇をすり抜けて長い階段を上る。

「ほら、ついたぜ。もう学校は目の前だ」

智之の言うとおり、階段を上った先の小高い丘からは、歩いても二分ほどで着ける場所に学校が見えていた。

「あ、ありがとうございます。あの、手を離していただけませんか？」

お礼を言いつつ、走ったからなのか照れてなのか顔を赤面させ、女子生徒は目をそらす。

それに気づいて智之も顔を朱に染めながら手を離す。

「本当にありがとうございます。では急ぎますので失礼します」
もう一度、今度はお礼の意味を込めてかわいらしい小さな頭をペコリと下げ、女子生徒は走って行った。

残された智之は少し丘の上から、月規市の風景を眺めてみた。
青い海に生まれ育った街並み。こんな町に殺人犯がいるとは、とても思いたくなかった。

丘を下りて自分の教室に向かうと、なぜか周囲から普段、全く浴びたことのない視線を感じた。

「よっ、智之」

突然現れて腕を首にまわしてくる栄太に、これは何事かと尋ねる。
するとなぜか彼は腕を絞めて絞めて――

「く、苦しい！ てめ、何しやがる……！」

「いやあ、お前てつきり抜け駆けしない奴だと思ってたんだけどな」
何の話だと聞き返す。

「とばけんな。朝下級生の女の子と一緒に、手をつないで走る姿が見られてんだよ！」

なぜか栄太は涙ぐみながら、俺もしたことないのにともらしつつ首を絞める。

「あ、あれ見られてたのか！」

「やっぱ事実かこのやろー！」

腕をタップするも、事実だと知ってしまった栄太は全く腕を緩めない。

「はなせ、つつってんだろぅが！」

渾身の後ろ蹴り上げが、栄太の股間を的確にとらえる。

「ぐふう！ それは、だめだ……ろ」

股間を抑えもだえ苦しむ友人を見下しつつ、朝あつた出来事を話す。

「そ、そういうことか。しかし何だな。奥手の智君がそんな積極的になってまあ」

「お前はどこまで行っても知能は成長しないのな」

ぼけに対して突っ込みすらない智之に、栄太は完全に拗ねて机に突っ伏してしまった。

これedyやく落ち着けると思ったが、周囲の男子生徒から、異常なまでの殺気をはらんだ視線を向けられ、しばらくは落ち着けそうにはないことを覚悟する。

そしてその放課後はと言えば、噂の元凶となった女子生徒と並んで歩いて帰っていた。

智之が帰ろうとしたところ、校門で待っていた彼女と一緒に帰ろうと申し出を受け、それを承諾したから現状があるわけだが、同時に多数の殺気を浴びる現状を作り出すことにもなった。

「先輩、今日の朝はすみませんでした。それとありがとうございました」

「いや、もう謝ってもらったし、お礼も言ってもらったからいいて」

そついうと女子生徒、門原奏《かどはらかなで》は顔を赤くして顔をそらした。高校一年生の彼女が見せる、本当にかわいらしいし

ぐさに、智之は困り果ててしまう。「で、でもびつくりしたよ。校門で待ってるとは思わなかった……」

「ご、ごめんなさい。その、先輩にもう一回ちゃんと謝ろうと思ひまして」

迷惑だったでしょうか？

懇願するような上目づかいは反則だ。

不覚にも智之は純粋な思いを抱く少女にときめいてしまった。

「ま、まあ何だ。良かったのか？ 俺の買い物に付き合わせちゃって」

智之は夕飯のおかずや日用品の入った袋を両手に持っていた。奏は持ちましようかと気遣っていたが、さすがに女の子に持たせるのは申し訳ないと、やんわり断っておいた。

商店街を抜けて通学する堤防沿い。

「じゃあ私はこっちなので、失礼します。おやすみなさい」

ぺこりと頭を下げる奏に、お休みと返して智之も帰宅する。

家でニュースをつければ、やはり殺人事件の続報が取り上げられていた。

「月規市で本日未明、バラバラ死体が発見されました。海に浮いている頭部をライフセイバーが発見し神奈川県警に通報したとのこと、方法が疑似しているということから同一犯とみて、同署は慎重に捜査を進めています。これで死者は七名にも上っており、周辺住民の方は必要時以外は外出しないようにと、警察から通達が――」

本当にたまったものではない。智之は心から嘆息した。

翌朝は昨日にまして、より一層物々しくなっていた。警察は防弾チョッキをつけ、三人一組となって市内を巡察している。

もちろん通学路の所々にも警察は配置されていて、自分の暮らしてきた平穏な街とは思えなくなってきた。

そんな嫌な気分も、学校に着けば吹き飛ぶようなサプライズが待っていた。

「ともゆきい！ てめこの野郎！」

教室に入るや否や、栄太が渾身のラリアットを食らわせようとしてきたのだ。それを腕で防ぐと、くんずぼぐれずのレスリングが始まった。

「な、なんなんだてめえは！ 朝っぱらから暑苦しい野郎だ」
智之もいい加減鬱陶しくなり、思い切りけり飛ばす。

だが栄太はそれをもとめせず、まるで血の涙でも流すような悲壮に満ちた顔で攻め寄ってきた。

「きいたぞこの野郎！ 昨日手をつないだ女子と仲良く買い物してたらしいじゃねえか！ もうゆるさねえ。野郎どもやつちまえ！」

栄太の掛け声と同時に、クラスの男子生徒が智之に襲いかかる。

このクラスは殺人事件よりも俺の私情のほうが大事かよ！

心の底からはき捨てると、全力で校舎を駆け回った。おかげでクーラーの利いた校舎内で汗だくになる羽目となってしまった。

そんなことがあった放課後も、なぜか智之は奏と一緒にになっていた。またもや校門で待ち伏せをされていた。

今日理由は、親の結婚記念日のプレゼント選びを手伝ってほしい、というものだった。

当初は断ろうとした智之だったが、上目づかいで懇願されれば断りきれはるはずもない。

そして現在、商店街にあるアクセサリーショップに足を運ぶこととなった。

なんて似つかわしくない場所にいるんだ。

深いため息を吐いて横目で奏をみると、目を輝かせてネックレスやら指輪やらを見ていた。

「先輩、先輩！ これ可愛くないですか？」

そう言っ指差す先にある、小さいハートの着いた金色のネックレス。

確かにかわいらしいとは思ったが、こういったことに疎い智之はかわいいと返事しかできなかった。

「もーっ、先輩！ 真面目に聞いてください！」

純粋な顔でほほを膨らませて起こるしぐさも、あざとさを感じさせずかわいらしい。また心がときめいてしまう。

「ちゃんと聞いてるって。あ、親へのプレゼントと書いて、実は自分がほしただけなんじゃないか？」

苦し紛れにからかうと、凶星だったように顔を赤らめ、あわあわと目を泳がせる。

「ば、ばれちゃいました？」

テヘツと舌を出す。ほんとうにこの子は俺を誘っているんじゃないだろうか？

そんなやましい気持ちさえ抱いてしまうあたり、彼も青春をしている。

結局親へのプレゼントは、おそろいの腕時計だった。嬉しそうな奏の横顔に、つい見とれてしまう。

「今日は無理を言ってすみません。先輩のおかげでいいプレゼントが選べました」

「いや、選んだのは門原さんなんだしさ？俺のセンスじゃロクな事にはならなかった」

そういうと奏はなぜか顔を赤めて俯き、そして横目で智之を見る。

「あの、私のことは名前で呼んでください」

ドキッと胸が高鳴る。それはつまり、そういうことなのか？

深読みをして智之も顔を赤める。

名前を呼ぶのか、いやしかしそれじゃまるで……。

悶々とした気持ちで歩いていると街灯に照らされ、歩いてくる人影に気がついた。

「こんな時間に一人で？　って、一人も二人も変わらないか……」

そこでふっと、ニュースのことを思い出した。

『連続殺人事件』

智之は警戒心をあらわにする。奏も智之の裾につかまっておびえた表情を見せる。

「せ、先輩……」

「大丈夫だ」

何かあっても守ってやる。そう意気込み、警戒しつつ人影のいる方向へと歩く。彼らが歩いているのは堤防沿いの一本道。逃げようにも曲がる場所も無い。

もし仮に犯人が異能者だったとして、反転して全力で走っても逃げ切れる気はしなかった。

犯人でないことを祈って一歩、また一歩と人影に近づいてゆく。すれ違い。高鳴る鼓動とは裏腹に胸が詰まるような息苦しさを覚えた。

通過してから数メートル。つまりでも取れたかのように智之は深いため息を吐いた。

「だ、大丈夫だったな。ほら、もう——」

横を見るが、そこに奏の姿はない。逃げる場所などなかった。それに何より、『腕を掴まれている感覚』だけがある。

「ひっ！ う、嘘、だろ……！」

掴まれている自分の腕を見る。そこは確かに奏の手に掴まれていた。

——腕だけがつかんでいた。

吐き出した。胃に入っている何もかも。本当に内臓まで飛び出してしまふのではないかという嗚咽。

ゆっくりと振り返ればおびただしい血の海に、奏だったとは思えないほどバラバラにされた肉塊。

また吐いた。もう出るものは残っていない。ただ胃液だけを吐き続けた。「チッ、もう一人いやがった。とり目つてのは嫌だね、まったく」

再び街灯に照らされる人影。

百八十センチほどの大柄な男。手には紅の液体に染まる刃渡り八十センチほどのナイフ。

間違いないこの男が奏を殺した。そう確信すると全力で走りだす。殺される、殺される、コロサレル！

息が苦しくなるうが、足に疲労がたまろうが走り続ける。だがそれも無駄なことだと、肩の鈍い痛みを感じて理解した。

「い、あがつ！」

よほど深々と切られたのだろう。まるでスプリングラーのように智之の肩から血が噴き出す。

「逃げんなつて。どうせ、逃げ切れない」

これだけの身体能力。間違いなく異能者だった。

「た、助けて……」 自分の血で顔を、体を汚し、それでもなお男に慈悲を求める。

だが彼のそんな懇願も、男の動作ですべて無駄なことだと知る。

「あばよ、せいぜい自分の運の悪さを呪いやがれ」

逆手に持ったナイフを深々と、全体重を込めて胸に突き刺す。ビクンと智之の体が跳ね、動かなくなる。

—— やれやれ、君は本当に死ぬことが好きなようだね。

どこからともなく聞こえる声。女性のものだ。

ほら、正義のヒロインのお出ましたよ。

何を言っているのか、自分はもう助からない。そう思いながらも、近づいてくる足音をその耳で感じていた。

「貴様！ こんなことをしてただで済むと思うな！」 凜として、

聞きはれるような澄んだ声。まるで名のある女優ではないかと思う声の女性は、腰の刀を抜き放ち男と対峙する。

「しつけない、お前さんは。どうせまた捕まえないんだからよ、そんな無駄なことはやめようぜ？」

馬鹿にするように言い、鼻で笑う。それが癪《かん》に障ったのだろう、女性は一瞬で男との間合いを詰める。

「さすが、実戦部隊つてどこか。だがな！」

罅迫り合いになったのも一瞬。男の腕力に女性は押し戻されてしまふ。

「このっ！ 馬鹿にしおつて！」

再び飛びかかる体制をとるが、男は智之を指差す。

「その男だが、まだ死んでねえみたいだぜ？ 確かに心臓を突き刺したはずなんだがね」 その一瞬。生存者だと言われ女性が智之を見た瞬間、男はまるで霞のように闇の中へと消えていった。

「くっ、また、逃がした……」

それが智之の聞いた、最後の言葉だった。

第一話「死」（後書き）

読んでいただいた方、ありがとうございます。雪華改めかん太でございます。

駆け足で第一話を書きあげてしまいましたが、まあ前に投稿したものを知っている方は、まだましになったのではないでしょうか？

主人公また死んでしまいました。さて彼はどうなってしまうんでしょう。声の通り彼は死ぬのが好きなんでしょうか？

なんて冗談を飛ばしつつ、次の話では正義のヒロイン登場です。ヒロインの正体は。智之を殺した男は何者なのか。殺人を犯す理由とは。これからどんどん盛り上がってまいります。

では第二話でお会いしましょう。

第二話 『異能者と死者』

ゆっくりと目を開けると、真っ白な天井が真っ先に目に飛び込んできた。

上半身を起こす。窓を見ると白いカーテンが風になびき、その隙間から夏の日差しが入り込んでいた。

「ここは、どこだ？」

ベッドに寝かされ、腕に点滴をつけられている。そして少しばかり痛む胸と肩。

——そうだ、俺は！

思い出した瞬間、智之の頭は覚醒した。

「に、逃げないと、また奴が——！」

ベッドから飛び出すも、寝てばかりだった体はすぐにいうことを聞いてくれるはずもなく、みっともなく転げ落ちた。

ちょうどいいタイミングでドアがノックされ開く。

転んだ体制で見上げた智之は入ってきた女性の、あまりの美しさに言葉を失った。

上等なシルクを黒く染めたような、つやのある長髪を腰辺りで結い、黒真珠のような黒く大きな瞳にキリッとした顔立ち。何とも凛として古風な雰囲気醸し出す女性は、まるでよくできた日本人形を連想させた。

「起きられたのか。動けることは結構だが、病み上がりであればしつかりと体の感覚を戻してからにするのだな」

堅苦しい言葉づかい。彼女の容姿ならば、今着ている黒いシャツにジーパン姿ではなく、振りそでなど和服のほうが似合うと確信した。

「私の顔に何か付いているのか？ 先程からずっと見られて気になるのだが？」

「あ、いや、悪い」

ずっと目をそらすと立ち上がろうとする。だがなかなか足に力が入ってくれない。

「そう無理をするな。君は二週間も眠っていたのだ。その間寝たきり、体がなまるのも仕方なからう」

女性は何之に近づくと、肩を貸してベッドに座らせてやる。

「ありがとう……」

自然と口からお礼を言っではみたが、状況が理解できない。何之は男に刺され、確かに死んだと思った。いや、間違いなく死ぬ傷を負わされた。

「なんで、俺は生きていられる？」

肩を深く斬られたし、心臓を一突きされた。自分の体なのに全くわけがわからない。

「君は運が良かったのだろう。たまたま心臓を外れ、何能者の治癒力を持つてすれば持たなくもない傷だった」

「ま、まて！ 何能者の治癒力って、俺はただの人間で、そんなおかしな力なんて持ち合わせてないぞ」

傷の癒え方も、確かに周りに比べれば早かったかもしれない。

だがそれだけだ。何之にはほかに思い当たるような出来事はなかった。

「何を言っている？ 何能者でなければ、あんな傷で生きていられるはずはないだろう」

女性は何、落ち着いて聞いてくれと前置きをして話を始める。

「まず君のことについてだが、あの治癒力を見た限り、間違いなく何能者だ。そして何能者と一口にいても、能力は多岐にわたり、個人でその能力の数や力は異なる。ごく最近になるまで気づかないこともよく聞く話だ。だからまずは、君自身何能者であることを自覚してもらわなくてはならない」

本当に思いもよらなかつた話に、何之は動揺を隠せない。

何か言おうとした何之を、最後まで聞いてほしいと押しとどめて話を続ける。

「さて、次に君の置かれた状況だ。まず襲ってきた男は、暴力団の構成員で望月哲也《もちづき てつや》という。奴が人を襲っている理由は定かではないが、姿を見られた場合に口封じのため殺している、我々は仮定している」

「つまり、俺は巻き添えを食ったと、そういうわけなんだな」

棘のある智之の言葉に、女性は少し言葉を詰まらせた。

「その通りだ、申し訳ないとは思っている。そこでだが、私にとある任務を申しつけられた」

「ちょ、ちよつと待ってくれ！ 今俺に起きたことの説明をしてくれるのはいいんだけどさ、その前にあんたは何者で、任務って何のことだ？」

話を聞いていた彼も彼だが、たださえ混乱しているのに、全く顔も見ただけでも無い人間が誰なのかわからず自分のことを話されると余計に混乱する。

「紹介が遅れて申し訳ない。私の名は八隅綾那《やすみ あやな》。厚生労働省、異能者厚生課の者だ。残念ながら詳しく話すことはできないのだが、異能者厚生課の本部から、君を守るようにという命令が下りた。そこでこれから私が、望月を捕縛するまでの間君を護衛する」

「——は？ なに、護衛？」

疑問形という智之に、そうだと肯定する。

「脅してしまうようで恐縮だが、奴は君が死んでいないことを知っている。だから口を封じるためにまた、君のもとに現れる。だから私は命を懸けても君の命を守り、同時に望月を捕縛、もしくは断罪する」

命を懸けるというその目は愚直で、本当にその覚悟があることを訴えている。

彼はここから逃げ出したい、こんなことに巻き込んだ綾那に八つ当たりしたい。そういう衝動を、命を懸けるという覚悟を受けて何とか押しとどめる。

そんな彼の衝動をくみ取ったのか、綾那は智之に小包を手渡した。ずっしりと重いそれを慎重に開けると、日本の一般人には全く縁のない、思いがけないものが入っていた。

「これ、拳銃じゃねえか！」

「そうだ。ベレッタという自動拳銃で、反動も少なく素人でも扱いやすい。両手で握り、しっかりと相手を狙えば当たるだろう。それにもし当たらなくても望月はひるむであろうし、その音を聞けば私も駆けつける」

手が恐怖に震える。拳銃を持ったことも無い、何より撃てば殺してしまうであろう凶器。

「こんなもん、撃てるわけないだろ！ 俺、拳銃を持ったこともないし、人殺しなんて……」

返そうとする智之を綾那は鋭い目つきで睨みつけ一喝。

「君は奴から逃げ切れる自信があるのか？ たとえ当たったことで殺してしまったとしても、それは己が身を守るためのいわば正当防衛。それにこれはすでに組織から許可が出ている。つまり合法的に人を撃てる。後は君が生きたいと強く思い、引き金を引くだけだ。それに先程いったらう？ 当たらなくても威嚇にさえなればいい」
「そうだ、当てなければ何の問題も無いんだ。智之は覚悟を決め、強く拳銃を握り締める。」

「あ、あまり強く握るな。暴発するかもしれないからな」

ビクツとして智之はゆっくりと拳銃を膝の上に置いた。

「冗談だ。今弾は入っていないから安心しろ」

——このアマ、いつかヤキ入れたる。

こんなときには冗談を飛ばすといいという上司の言葉を信じて言ってみた綾那だが、恨めしそうな智之の視線を受けてたじろぐ。

咳払いを一つ、気を取り直して拳銃の説明をすると弾を手渡す。

「いま、ここで弾をこめて用意しておけ。最悪、今夜襲ってくるかもしれない」

手渡された小さい箱を開けると、九ミリの弾が六発入っていた。

震える手で一発手に取ると、言われるがままホローポイント弾、通称ダムダム弾をマガジンに込める。

「弾についてただけ補足説明しておく。異能者に通常の九ミリ拳銃弾はあまり効果がない。すぐに傷が癒えてしまうからだ。だが君に大きな銃を撃つのは無理がある。そこでその弾の出番というわけだ。ホローポイント弾と言って詳しい説明は省くが、弾が人体を貫く際に与える損傷を大きくすることで相手の動きを一時的に止めることができる。とはいえ、やはり異能者相手では気休め程度でしかないが」

そんなことをいって、この女はやはり男を殺させたくはないのではなからうか。などと勘繰ってみるが、智之自身人を殺す気は更々無い。

人殺しなんて最低の人間がすることだ。

「もし、落ち着いて狙えるのであれば望月の顔の中心を狙え。よほど運が良ければ多少それでも頭を撃ちぬけるだろう。異能者といえど、脳を損傷しては生きることが不可能であるからな」

「あんた、俺に殺させたいのかそうじゃないのか、はっきりとしてくれ。まあ殺させたいといっても、俺は絶対人殺しなんてしねえ」

拳銃を枕元に置くと、綾那を睨みつけて吐き捨てる。だが彼女は鼻で笑い、勘違いするなと返す。

「よほど運が良ければといっただろう？ 落ち着いてと言ったのはそれを心掛けるということだ。まして拳銃を持ったことも無い君が、頭部を狙い撃てるのはとても思えん」

「なっ！ なら何でそんなことを言うんだよ！」

意味も無いのに落ち着いて狙えだの、頭部を撃ちぬけだの、到底恐怖を刻み込まれている彼がきょうはずもない。

「なに、護衛だと言ったが私としては、ただ君がおとりになつてくれれば殺そうとする間に付け入り、切り捨ててやろうというだけの話。陽動さえしてくれば私は満足だ」

「お前、俺がどうなつてもいいって？ だったら奴が来たらお前が

いることも伝えて、ついでに今の会話の内容もバラしてやる」

「やれやれ、と綾那は肩を竦《すく》める。

「別にかまわんが、その時は君が死ぬ時だ。次こそ奴は君を殺すぞ？ それに私が今話したことを奴に言っただとして、ならば私は別の機会を待てばいいだけの話だ」

頭が沸騰した。殴りかかろうとも思ったが自由の利かない体ではそれも叶わない上、異能者である彼女に向って行ったところで返り討ちにされるのが目に見えている。

だからと言ってこれ以上反論すれば必ず綾那にいいようにあしらわれるだけだと思った。

反論してこないことをやるべきことを理解したととった綾那は、智之に背を向けて「せいぜい男らしく、負けず嫌いなどころでも見せておけ」と言い残して部屋を去っていた。

その一言で智之は、いいように誘導されたことを知る。

ムキにさせておいておけば、何の覚悟もしない人間よりは前向きに行動するだろう。

智之は深いため息を吐くと、ベッドに仰向けになる。

「殺しはしない。でも、やれることはやってやる……」

ここまで女性にいいように言われて、男としての意地が黙っているはずもない。陽動だろうが何だろうがやってやると吠える。

それをドアの外で聞いた綾那は、男の子はこうでなくてはとつぶやいてその場を後にする。

その夜、智之は手に拳銃を持ち、男が現れるのを待った。

待つ、時計が深夜零時を刻み、丑三つ時を過ぎても布団の中で人がやってくるのを待った。

何時になっただろう。睡魔に負けそうになっている智之の耳に、甲高い足音が聞こえてきた。

来た、奴だ！

隣の部屋のドアが開く音、向い側の部屋のドアが開く音。次はここだ、と覚悟を決め拳銃を握り締める。

ガラリ、とドアが開くと同時に智之はかぶっていた布団をはいで起き上がり人影に銃を向ける。

「う、うごくなあ！」

と、そこまでは良かった。

決まった、と心の中で軽い優越感と、それでもぬぐい切れぬ恐怖心から手が、体が震える。

一方銃を向けられた人影は、凶悪な背の高い男でもなければ綾那でもない。

「き、きやあああああ！」

超音波ともとれるような耳の痛くなるほど高音の悲鳴を上げ、影の主である女性看護師は持っていた懐中電灯を投げ捨てて逃げ去っていた。

「――あ、あれ？ はっ！ 違うんですう！」

弁解しようにもすでに看護師は、ナースセンターに逃げ込んでいるところであった。

その夜は悲鳴を聞いた警備員が駆け付けたり、見知らぬ入院患者が眠りを覚ました元凶を睨みつけに着たりと、まさにやる気が空回りすることとなった。

「あつ、はははは！ 笑いが止まらんぞ。本当に面白いことをしてくれるな」

翌朝事情を聞いた綾那は、智之の部屋で腹を抱えるほど大笑いしていた。

本人もいつぶりにこれだけ笑っただろう、と目に涙まで浮かべる始末。

「わ、笑い事じゃねえよ。おかげでこの部屋に警備員は殺到するわ、婦長さんには怒られるわ、患者さんから痛い視線をうけるわで、散々なんだぞ？」

これもお前がたきつけるから悪いんだと、瞼が鉛のように重い目で睨むがいまだに綾那は笑いを抑えようと必死に噛み殺していた。

「いや、自業自得であろう。本当にどうしようもないな、目の下に

クマまで浮かべて」

また嘔き出しそうになる衝動を必死に抑える綾那に対して、とにかく寝たいという生理現象を利用して布団にもぐり、完全に無視して眠ることにした。

「そうむくれるな。まあ昼間は襲ってこないと見積もっていいからゆっくりと休め。それに私もすぐそばに控えている」

焚き付けた元凶が何を言うのか。

なにせよ昼に襲ってこないという言葉信じ、智之は眠りに就くことにした。

軽いため息を吐いて退室し、ドアを閉めた綾那は一言。

「今夜、か……」

そうつぶやいた。

その夜もまた懲りず智之は拳銃を握り締めて布団にもぐりこんでいた。同じ失敗をしてたまるかと、今度は布団の隙間からドアを凝視する。

それから何時間。全く同じことを昨日もしてたな、などとあくびを掻きながら思う。

また看護師に銃を向けたら、今度こそ追い出されるな。

そんな冗談じみたことを思えるあたり、昨日の出来事のおかげで少しは余裕ができたのかもしれないと思う。

すると今度は音も無く、ゆっくりとドアが開いた。

「みーつけた」

小声で呟くような男の声。智之を殺そうとした張本人のものに間違いない。

先程の余裕はどこへ行ったのか、体が恐怖に震える。

昼間とは違いカーテンからさす月光が凶悪で巨大なナイフの刃を照らし、ギラギラと光っていた。

「さーて、冥土への旅路ですよっ」

ゆっくりとナイフを振り上げ一歩、また一歩と智之に近づいてゆく。

恐怖で意識が飛んでしまいそうなほど、頭に血が上ってボーっとする。だが腹はすでに決まっていた。

あいつをぎゃふんと言わせるためだ、よし、やってやる！

あと一メートル半と近づいたところで、勢いよく起き上がった。

「——お前！」

綾那が近くにいることは計算に入れていた。

可能な限り音を消し、気配を消し入った哲也は油断していた。まさか智之が銃を持っていようとは。

「こんにゃろー！」

両手でしっかりとグリップを握り、わけもわからず銃口を哲也の体の中心に向けて引き金を引く。

甲高い炸裂音。

銃口から散った火花が部屋を一瞬、月光より明るく照らす。

「チツ……！」

舌打ちをすると同時に体をひねり銃の射線から逃れようとする。だが発射された弾丸は男が体をひねるよりも速く、脇腹を貫いた。激痛に顔をゆがめ、血が流れる脇腹を手で押さえる。

そして智之に対し、これまで以上に殺気を孕んだ目を向ける。

「そ、んな……」

銃を向けようとするも手が動かない。

手だけではなく体すら動かない。できることと言えばただ、男を見ることがただだ。

蛇に睨まれた蛙とはまさにこの状況のことを言う。智之は理解した。本当の恐怖を感じると体が動かなくなるということを。

「舐めた真似、してんじゃねえよ！」

「冗談交じりに殺そうとしていた先程の姿はどこへ消えたのか。一蹴の跳躍で智之までの距離を詰める。

——し、ぬ？

叫ぶにしてももう遅い。ナイフはもう後数センチで智之の胸を貫く。

息がつまり、叫びたくても言葉が出ないのだ。

目測通り病院の中庭、芝生の生えているあたりに着地するが、自身の二倍以上ある体重と約二十メートルから着地した衝撃に、足は耐えられなかった。

「くっ、ああっ！」

智之だけには衝撃を与えまいと、地に足が着いた瞬間にかろうじて横転し衝撃を緩和する。二人は絡まるように転がった。

勢いが無くなり芝生の上で止まると、起き上がろうと足に力を入れる。

だが着地の衝撃で足首を捻挫したらしく、生まれたての小鹿のようにフラフラと立ち上がるのが精いっぱいだった。

「――痛っ。そうだ君、大丈夫か！」

と、智之に目をやるがピクリとも動かない。

まさか。悪い予感が浮かぶ。

刀を杖代わりに、力の入らない足を引き摺りフラフラと智之のもとへ近づいてゆく。

「き、君――！」

心配にひきつった顔で覗き込んで、彼女は智之が動かない理由を理解した。

――気絶しているだけではないか！

白目をむいて、恐怖に口の端をひきつったままの表情で気絶。本当に心配した自分がばかしくなってくる。

「やれやれ。まさか窓から飛ぶとは思わなかったぞ」

ゆるんだ空気は細い糸が張りつめたかのように、冷たい緊張に包まれる。

「さあて、そんな足じゃもう戦えねえだろ？ おとなしくその小僧が殺されるのを見てろよ」

その言葉に反発するよう杖にしていた刀を構えなおし、切っ先を哲也の喉元に向ける。

自身の力で支える脚は震え、もう跳躍することはおろか走るこ

さえできないことを訴えている。

「私は、まだ戦えるッ！」

「やれやれ、気丈なこつて。だがな、お前に興味はないんだ」

跳躍し、綾那の横をすり抜けて智之を狙おうとする。だが咄嗟に捻挫した左足で踏み込み、刀を伸ばしてそれを阻止する。

左足に響く鈍い痛み。もうこれ以上動かせば捻挫した足は動けないほど損傷してしまう。

「邪魔、してんじゃねえよ、碌に動けねえくせによ！」

ケガをしても智之を守ろうとする綾那を障害と認識し、いったん目標を変える。

一撃で殺せるであろう哲也は、だがあえてそうしない。左足に負担がかかるように綾那の左側へ執拗な攻撃を加える。

「くうっ！ この……」

攻撃を刀で受けるたび、その衝撃で痛みが走る。

さらに哲也が大振りで振り下ろしたナイフを刀で受けた瞬間、さらにかかる足への負荷、激痛。

「くあああっ！」

痛みに耐えきれず、綾那はうめき声を上げる。

「いったい、何が……」

その声を聞いた智之が目を覚ました時、綾那がナイフの勢いを殺しきれず肩口を斬られる瞬間を見た。

「おら、小僧も起きたことだしよ。そろそろお前死んどけや！」

脇腹、足、腕。綾那の体に次々と凶刃の跡が刻まれる。

そのたび苦痛に顔をゆがめるも、その場から一步も引こうとしない。

「何でそこまでして、その小僧を守ろうとしてやがる！ 死にてえか！」

気丈というだけでおさまらない、死の覚悟すらしているような綾那にいら立ちを覚え、攻撃を加えつつ吠える。

「約束、だからだ……！」

精いっぱい踏み込みつつ刀を大振りし、何とか哲也に距離を取らせる。

一方距離をとった方は、怪訝そうな顔をする。

「約束だと？　どんな約束かしらねえが、そんなもんで手前の命を投げようってか？　馬鹿げてるぜ」

「馬鹿げてなどいないさ。私は彼を守ると約束した。私の命を懸けても、君を守ると！」

もう立つことすらままならない足、満身創痍の体、しかしその目は覚悟と意思をはっきりと映し出していた。

「こ、このっ……！」

今斬り込めば、間違いなく綾那を一撃で葬り去ることができる。

異能者との闘いなどできるはずのない智之などは虫を踏む潰す程度の事。

だが哲也は動けない。

綾那の気迫、覚悟、純粹な思い。

「くっそお！　馬鹿にしやがって！」

大きくナイフを振るい空を斬ると、再び綾那に殺気を向ける。

「そんなに守るってんなら、地獄で閻魔から守ってりゃいいだろうが！」

終わりにしようと斬りかかったところで、男は踏みとどまる。彼の前に突然白衣の女性が現れたのだ。

しかもその顔は確かに見覚えがあった。

「おいおい、何の冗談だよこりゃ……。どうやって生き返りやがった。継接ぎして元に戻した人形ってわけじゃ、ねえよな？」

「私の体に継接ぎは見えるかね？　れっきとした人間だよ」

その後ろ姿、声、何もかも智之の記憶にあるものだった。しかもごく最近。

「おまえ、どうして……」

「やれやれ、手間をかけさせてくれますねえ、先輩は」

小さくかわいらしい顔に呆れた表情を浮かべて智之に向ける。

「――門原、奏……！」

上着である白衣の両ポケットに手を入れ、科学者とも医者ともとれる容姿で智之を遠目から見下げる、肉塊と化したはずの下級生。

「いやですね、名前で呼んでほしいと言いましたが、フルネームでとは言ってませんよ？」

冗談を飛ばし、あざとさを感じさせないかわいらしいほほ笑みを浮かべるその表情は、心ときめかした門原奏その人だった。

第二話 『異能者と死者』（後書き）

読んでいただいた方ありがとうございます。

ネタが思いつくうちに早々と投稿です。

あとがきから読む人がいたらすみません、すこしネタばれっちゃいます（汗）

普通の人間だと思ったたら異能者、死んだと思ったたら生きてた、そして死んだと思っただ後輩も生きてた。

こう書くと意外なことばかりが起こってるような気がしますね。なんか序盤なんですけどちょっと自分では飛ばしてる感が否めないところですよ。

今回はようやくメインヒロイン的キャラが登場しました。

やっぱり日本刀を持つ女の子っていいですね？ そそりますよね？ 脳汁あふれ出しますよね！？

・・・あ、僕だけっすか？

おまけに死んだと思ってた奏でもあらわれてカオスなことになっております。

この二人が主人公に、物語にどう絡んでいくのか、ぜひとも彼女たちの活躍に期待していただきたいと思います！

（え、主人公はって？ 野郎は知らん！）

というわけで駆け足で書いております本作、次回も見てください、うれしいと思います。

というか絶対うれしいっす！

ではこのあたりで、ぜひ次回もお読みいただければ幸いです。

第三話 『同居と殺人』

第三話 『異世界人と共同生活』

状況を理解できず、白衣の女性一人を除き全員硬直していた。

体をバラバラにされた奏が生きていて、殺したはずの男の前で対峙しているのだ。

その中で一番納得がいつていないのは殺した張本人だろう。間違はなく肉塊に変えたはずだったのだから。

「なんで生きてやがるんだおい。まさか俺を殺すために地獄から甦ったとか、そんなくだらない事を言わないでくれよ？ この世界はそんなファンシーなもんじゃねえんだからよ」

とりあえずは奏が生きている理由を知りたい。だからこそ理由を尋ねる。

「物思いにふける、なんて言葉あるだろ？ それと同じだよ」

「あ？ わけがわからねえな。それとてめえが生きてる事とどう関係がある？」

物思いにふけることは誰もあるだろう。

だが物思いに耽ったところで人が死んだことなどと誰が思い浮かべよう。人が死ぬところを想像して周りが見えなくなる、なんて常軌の沙汰を明らかに逸脱している。

哲也が言葉の意味を理解できていないことは一目瞭然。奏は鼻で笑うと、馬鹿にしたような笑みを浮かべて説明を始める。

「人は深く物事を考えているとね、それが現実なのかそれとも空想なのかわからなくなることがある。それは異能者という、集中力の高い生き物であればなおさら増大する。つまりお前には私を殺したという空想を見せ、先輩には私が殺されたという空想を見せた」

「どうやったらそんなことできんだよ！ 俺の脳みそをいじくったわけじゃねえだろうが」

脳みそをいじった、という表現はあながち間違いではないと肯定する。

「脳に限らず、人体は電気によって命令し、動いている。要は電気回路と同じだ。だから私はお前と、先輩の電気回路に干渉し幻覚を見せた。——こんな風にね」

哲也は少し離れた所から聞こえていた声が突然自分の耳元で聞こえ、そして喉につき付けられる冷たい感触に視線を下げる。

なぜか奏は自分の懐にいた。

耳元に口を近づけ、喉には手術で使われる鋭いメスを当てている。

「な、なんなんだ、てめえは……」

つい先ほどまでは二メートルの距離があつたのにもかかわらず、たつたの一瞬で懐に入られるだけではなく、凶器までつき付けられている。

傍観していた二人も別の意味で驚きを隠せない。

「私は心理学者でもあるんだ。だから心を操ることもできるんだよ」
冷たい笑み。先程のかわいらしさなどみじんも感じさせない、狂気に満ち満ちたその表情に哲也の頬を冷たい汗が伝う。

哲也の異能力者としての力は綾那の知るところではかなり上位に位置している。だからこそありえなかった。彼がなにもせず、ただ懐に入られるのを茫然と立ち尽くしていたのだから。

「さてここで貴方には二つの選択肢がある。ひとつ、このまま喉を掻き切られて死ぬ。ふたつ、負けを潔く認めて退く。さあ選びなさい、ダークヒーローさん」

喉にメスをつき付けられてから数分。哲也は動くことなく奏の様子を見ていたが、間違いなくこいつは喉を斬ると確信すると、ナイフを鞘に納める。

「悪役にしては殊勝だ。素直な君に免じてここは退路を譲ってあげるよ」

いつの間にか喉に冷たい感触を与えていたメスは離れ、奏はまた元の位置に戻っていた。

「覚えてやがれよ。次はてめえも殺してやる」

捨て台詞を吐くと、飛ぶように病院の塀を越えていった。

「悪役らしいセリフをどうも」

やれやれと智之たちに振り返り、にっこりと笑みを浮かべる。先程の殺気を感じさせるようなものではなく、年相応ともいえるかわいらしいものだ。

「さてお二人とも、今日はもう遅いことですし部屋に戻って休まれはどうです？ あ、E - c a tの方はすぐに治療をされた方がいいですね。治癒が早い分、変な方向に固定されかねないですから」

E - c a tという言葉に怪訝そうな顔をする智之に対し、その存在をしている奏に対して驚きを隠せない綾那。

「なぜ、それを……！」

「さて、まだ深く詮索する時ではないでしょう。まずはご自身の治療に当たられるのが一番かと」

またもかわいらしく笑む。本当に考えていることが分からない人物だと、綾那は警戒心を強めた。

かくして騒ぎを聞き付けた警備員と医者に連れられ、二人は院内へと運ばれていく。

翌朝は退院という形で、やはり病院を追い出された。

当然のことだろう。壁には銃痕、窓ガラスは粉々になり入院患者からの苦情は数えきれない。

とはいえ実質ケガをしているのは綾那のみで、智之の傷はすっかり癒えていた。

「傷跡が跡形もない。これも異能者の力、ってやつなのか」
自分の肩を見てつぶやく。

普通の人間ではない、おかしな力を持つ特別な人間の仲間入りを果たしてしまったのだと、がっくり肩を落として。

「前向きに考えるんだ。言っただろう？ 異能者でなければ死んでいた、と」

「そうですよ先輩。命あつてのものだね。それに主人公が死んだらストーリーはどうなるんです？」

三人肩を並べ、堤防沿いを歩く。朝の日差しも海から吹く潮風も、すべてがいつも登校していた道と変わらない。

ふと思い出した。自分が斬られた場所。奏が斬り殺されたはずの場所。

日常的に歩いていた道の中に非日常が混入してしまったことに戸惑い、そしてふと思う。

「で、この後はどうすればいいんだ？　とりあえず俺は普通の生活に戻るんだよな？」

友人と馬鹿なことを話し、面白みのない授業を受ける平穏な生活、淡い希望を持ちながら綾那に尋ねるが、帰ってきた答えは想像通りのものだった。

「奴をどうにかするまでは、君の命が狙われる危うい生活は続くであろうな」

早く戻りたいものだとは思っていたが、哲也が生きている以上それは当分戻ってこないだろう。

それを思うとなおさら気持ち沈んでいくのがわかる。

「俺はどうしてこう、不幸体質なんだろうな。まったく……」

「どこが不幸なんです？　女の子二人と肩を並べて歩いてるんですよ？　ゲームでは喜ぶべき日常イベントではないですか」

奏はかなりアレな感じの性格をしているようだ。

壊れた日常と、普段抱いていた奏のイメージの違いにより深くため息をつく。

「で、お前らはどうするんだよ？　門原は家があるとして、八隅さんだっけ？　行くあてはあるんだろうな？」

「一応支部はある。だが君を危険な状況に置き去りにはできない。言っただろう、命を懸けても君を守ると」

危ない思いをしても智之を守るという信念は一寸たりとも揺らいではいなかった。

「だから私は君の家に泊まることにする」

助けてもらったお礼を言おうと開きかけた口は、予想だになかった言葉にパクパクと開閉を繰り返して、出すべき言葉は喉で完全に詰まった。

「はあ？　ちよつと待てよオイ！　なんで俺んちに止まるなんてことになるんだ？　せめて隣とか、近くならどこでもいいじゃねえかよ」

「いや、それでは急襲に対応できないかもしれない。やはり君のそばにいたほうがいい。実は昨晚襲ってきたときも、私はベッドの下に潜んでいた」

奏のイメージと同様、堅物キャラだという綾那のイメージもいっぺんに崩れ去った。

なぜそんなユーモラスな待ち伏せをしているのだと。

「……だからいきなり現れたのか。まあ気付かなかった俺も俺だけどさ」

「え、八隅さん先輩と同棲ですか？」

同棲、その言葉に二人は顔を真っ赤に染めて動揺する。

「い、いや、同棲などという華のあるものではなくてだな！　守るならやはり護衛対照の近くにいたのがという！」

必死に弁明をする綾那に対し、奏はニヤニヤと不敵な笑みを浮かべ、いかにも悪たくみをしている。

「なるほどなるほど。そういう理由で男の家に入り込むという魂胆ですか。いったいこのギャルゲーなんでしょうね」

「ぎ、ぎやるげえ？　よくわからんが兎に角！　貴女の認識には大きな間違いがある！」

男の家に入り込むという言葉に過剰なまでの反応を見せる綾那に、初々しい生娘のようだ、などと如何わしい視線をむける。

その視線により感情的になり、反論を強めていく。

「き、生娘に決まってる！　私はそういった経験など一度も——」
そこで自分のさらしている醜態に気づいたのだろう。バーナーで

あぶつた鉄のごとく、頭から湯気を吹きださんばかりに顔全体を真っ赤に染めて俯く。

「そういうことなら、私も先輩の家にお世話になっちゃいますね」
語尾に音符マークでもついていそうな爆弾発言をすると、鎮火を待っていた智之もさすがにあわてだす。

「い、いやいやいや！ お前には親とか帰る家とかあるだろ！」

「私家族いませんよ？ もう五十年ほど前に死んじゃいましたし、家だって仮住まいみたいなもので」

「いやちよつと待て！ 五十年前に死んだっておまえ何歳だよ！」
当然の突っ込みに、かわいらしく人差し指の先を鼻先に充て、女の子に年を聞くのはご法度ですよと言われて、またかわいいななどとときめいてしまった自分の甲斐性が少しばかりむかついた。

「いや無理！ マジで勘弁してくれよ。居候が一気に二人なんて」

「いいじゃないですか。ただ飯ぐらいじゃないんですよ？ 剣士と魔法使いがパーティーに加わったと思えば――」

思えるか！

心からのツツコミだった。

「そ、そうだぞ？ 君の命を守る人間が二人もいるのだ。むしろ歓迎すべきだろう。あと異能者には長寿な者が多いのだ。長ければ二百年も生きる人間もいる」

まだ動揺しているが、多少落ち着きを取り戻した綾那が説明をする。

「そういうことです。では問題なしということで、私は先輩のおうちに……」

「ちよつとまでやあ！ 俺は了承してないぞ。一人暮らしでさえ生活費が苦しいのに」

これからバラ色の同棲生活が始まると心ときめかした奏だが、生活費という現実問題を聞いたとたんしぶそうな顔をした。

何を隠そう、奏もアルバイトでかろうじて生計を立てていた身。金銭的な問題には敏感な方だ。

「お金の問題はまあ、私もバイトをするということで。水的な意味で」

「却下あ！　んなことさせるか！」

冗談なのにとむくれる奏。

「ま、まあ金銭の問題なら大丈夫だ。組織から多少ではあるが支援金という形で私に入る。それに私もただ働きしているわけではない」
「そういえば厚労省に勤めているということは公務員なのか。今更ながら智之は思った。」

「じゃあ決定つてことで！　さっそく先輩のお宅拝見！」

楽しそうな奏とは対照的に智之はがっくりと肩を落とし、もうどうにでもしてくれと言わんばかりに深いため息をつく。

それから二十分ほど歩いて智之の住むマンションに到着した。

「ほう、ここが君の家か。なかなかいいマンションだ」

「ああ。そうだな」

智之は投げやりに答えを返すと、マンション入り口のロックを解除する。

「このようないいマンションに。さぞご両親もご立派な方なのだろう。挨拶をしないと」

その言葉に、ぴたりと智之が立ち止る。

「どうした？　入らないのか？」

智之に向き直ると、彼の顔は無理やり笑っていた。彼はこういう話になると、取り敢えず笑うようにしている。

「俺には、両親はいないんだ。小さいとき、事故でさ……」

事情を端的に話す。もう何人もこの事を話したが、そのたびに心が痛む。

「そ、そうか……。すまなかった」

そう言う事をわきまえている綾那は、申し訳なさそうに、表情を曇らせている。

「いいって。どうせすぐに分かることだしさ。お前は知らなかったんだから、そう気にするなって」

「そうか。そういつてくれると、ありがたい」

綾那は気落ちしながらも、智之の後ろに続く。

奏は事情を知っていたかのように、何も言わずそれに続く。

三人はマンションの中に入ると、エレベーターに乗り込む。機械音とともにエレベーターが上昇し、五階に止まった。

エレベーターを出て右に曲がった一番奥の部屋。そこが智之の暮らす場所。

約二週間ぶりに帰ってきた我が家に入ると、ようやく智之は心から安堵することができた。自分の日常があつた家だからこそ、一番心落ち着ける。

後に続く二人も家上がり込むと、物珍しげに部屋中を見まわす奏。廊下を抜けて八畳ほどのリビング・ダイニングキッチン。カーテンは閉め切られて薄暗い。

智之がカーテンを開けると、日の光が部屋を明るく照らす。

「なかなかいいマンションですね。3LDKで広く感じるいい物件です。お金の問題からすれば、ただの高校生が暮らすには少しばかり無理がある気がします」

「それなら問題ない。ここは親の遺産で買ったもんだし。バイトをしてるとはいえ伯父さんからの仕送りもあるしな」

そういったものでもなければ、とても智之のような学生が暮らせる部屋ではない。だから最初は何も知らないクラスメイトにからかわれることもあつた。だが事情を知るにつれ、周囲の目は皮肉から同情に変わっていった。

だが同情の目を向けられ続けるなどまっぴらなので、普段明るく接することを心掛けて今の学校生活があつた。

二人をテーブルに座らせると智之は手際よく茶を入れ、茶づけとしてクッキーを出した。

「で、とりあえず聞きたいことは山ほどあるけど、まずは門原さんがなんで生きているのか。なんで平然と望月とかいう奴の近くまで歩いて行けたのか、聞かせてくれるか？」

疑問を一気にぶつけたら自分自身も混乱してしまう。まずは自分の身に起きた、時間的に近いことから解決していくことにした。

「私の能力は病院でも言いましたが、人の心を操ること。操るといっても、私の言ったとおりに動くというものではありません」

奏の説明はこうだ。

殺された時の光景は望月の中の記憶で、今回の殺し方に疑似する記憶を引き出してそれを見せた。それを智之の脳とシンクロさせることによってあたかもそこに、バラバラになった人間があるように見せた。

望月の懐に入った時も同じ原理を使い、そこに奏がいるように見せて実態は望月の懐に歩み寄っただけ。その時は脳のシンクロを行っていないので傍観していた両名には『動かない望月に歩み寄る奏』が見えていたというわけだ。

「つまり幻覚を見せる、という認識でいいのだろうか？」

「幻覚といえば幻覚。八隅さんの言うことは間違っています。ですが私は脳にある記憶を網膜に投射してそう見せている。ビデオでいう再生機能といったところでしょうか」

なんとなくわかりやすい答えだった。

要約してしまえば幻覚を見せる能力とも言えなくはない、という認識でその話題は収まった。

「次に、八隅さんの詳しい事を聞きたい。異能者厚生課というのはどういうところで、八隅さんは何をしてるんだ？ あとE-catつてのも教えてほしい」

「うん、異能者厚生課とは読んで字のごとく異能者が普通の社会で生活してゆくことを支援する組織。そしてその中でも異能者特別対応班というものがあり、門原さんが言い、君が疑問視している組織だ」

E-cat、正式には『Extrabeing Counter Ability Team』和約で対異能力者部隊という意味ということ。一般社会に何らかの形で危害を加える異能者を取り締ま

り、投降の意思がなければ組織の権限によりその場で殺すことができるという実戦部隊。

「私はE-cat本部、危害を加える異能者の処理を担当する第二班に属する。区分はいくらかあるのだが、それについては割愛させてもらう。そして私は担当として望月の捕縛もしくは断罪と、望月の属する暴力団の実態解明を行っている」

断罪。つまりその場で殺すということだ。

話せばわかる相手であれば彼女もむげに殺すことはしない。だが抗うようであれば権限において、望月をその場で斬り殺すことを覚悟している。

「さて次は私の疑問も解決させてもらおう。門原さん、貴女はいたい何者なのです。私の素性も、彼の素性も知っていたようですが」聞かれることを予想していた奏はすぐに口を開く。

「私は異能力開発研究所に所属する研究員です。八隅さんの言葉を真似るわけではありませんが字の通り、異能者としての能力向上や異能者の持つであろう能力の開発、異能力の起源やこういった力があるのかの研究をする施設です」

曰く、接触が予想される人物の素性は国家組織である研究所の権限によりある程度調べているらしい。

そして異能力開発研究所という言葉聞いた綾那の渋い顔は、いいイメージを持っていないことを示唆する。

「異能力開発研究所、通称異能研究所。行き過ぎた実験や人体実験をしているという噂を聞いている私からしてみれば、あまり印象は良くない」

「多少無理を通して実験をすることはありますが、あくまで国家組織である私たちはモラルと法令に基づいて行っています。人体実験をしているという事実はありません」

とりあえずはその言葉を信じることにした綾那だが、疑心が晴れたわけではない。やはり彼女にとっては怪しげな組織というイメージしかない。

結局その日は互いの疑問を解決しあう場となり、前日の疲れも出てか日が暮れたら早々に三人は眠りに就いた。

久しぶりに学校に登校した智之はクラスメイト達からの退院祝いから復帰の歓迎を受け、目がしらに熱いものがこみ上げてくるのを抑えられなかった。

ともに騒ぎ、勉学に励むいつもの顔ぶれを見ると、自分は普通の高校生なのだという事を改めて思わされる。

いつもはつまらないとふまじめに授業を受けていたが、教師のしやべることを聞き入るように受けた。体感した非日常の出来事の苦痛さに比べれば、勉強なんてものは聞いているだけでいいのだから、まったくもって気楽なものである。

そして帰りとなれば奏と合流し、マンションまで帰る。護衛も兼ねて肩を並べ歩くことを了承した智之だが、半ば渋々受けた申し出でもあった。

「そんな不機嫌そうな顔しないで下さいよ先輩。出会ったばかりのころは、私に心をときめかしていたくせに」

心情に気づいていた奏は悪戯っぽく笑ってからかう。一方凶星を衝かれた方は顔を赤く染め、あさつての方向を向く。

「そ、そんなことねえよ。だ、大体お前みたいな色気のない女を好きになんて……」

色気のないという一言に顔をひきつらせる奏だが、かろうじて怒りを押しとどめた。

「わ、私の能力は人の心も読めるんですよ。こうしている今でも、読もうと思えば先輩の思っていることを読めるんですから」

からかうなよ。

かわいいとは思ってたけどさ。

一緒に帰れてうれしいけどよ……。

読んだ言葉を次々口にするたび、智之はわけのわからない雄叫びを上げた。

「わ、わかったからもう勘弁してくれ」

恥ずかしいあまりに顔が熱い。穴を掘ってブラジルまで行ってしまいたい気分だった。

「ふふーん、わかればいいんですよ。と、さてまた襲われたらかなりませんか、早々におうちへ帰りましょう」

襲われても奏がいれば大丈夫な気がしたが、綾那を一人にしておくのも気が引けて、足早に帰宅することにした。

その夜は望月の動向を探ることと、接触したときの対応について話し合うこととなった。

「現状では、望月は月規市に潜伏したままということが分かった。通行できそうなすべての道をE-catで監視しているわけなのだが、この二日とも一度として現れたという報告はなされていない」
退路の監視だけではなく、市内も探索しているが一向に足取りがつかめず警戒をげんにしている状態だという。

殺人事件も起こらず、発見の報告も無い。智之たちを殺す隙をうかがっているとも考えられなかった。

「E-catは引き続き望月の動向監視と、背後にある暴力団組織の解明に力を注いでいる。以前言ったとおり、奴は昼間に人を襲うことはない。必ず夜に人気のないところで犯行に及ぶというのが奴の行動だ」

確証はないが昼間は安全ということになる。だが発見されないようにしている以上、いつ襲ってくるかなどの今後の動きが全く読めなくなっているというのも事実。

次に襲われた時の対策について、綾那は智之に拳銃をまだ所持しているかを尋ねる。

「あ、ああ。言われた通りカバンの底を二重にして隠してる」

「襲われた時は迷うことなく撃て。銃声を聞きつければ私の仲間が駆け付ける手筈となっている」

智之個人の警護に抜かりはなかった。それだけ望月の捕縛、組織の実態解明に力を注いでいるのだろう。

だがその時、ついていたテレビから不穏なニュースが流れた。

「今日の夕方、バラバラにされた二人の男性の死体が発見されました」

誰もがテレビを食い入るように見る。

「月規市の商店街の路地裏で発見された遺体は、これまでの連続殺人と手口が全く同じことから、同一犯として調べを進めています」。

なお、この殺害された男性については、異能者対策チームの一人だったとして、警察は警戒を強めています」

警戒に当たっていた E - c a t の人間に間違いなかった。

綾那の携帯電話に着信がある。会話の内容は今ニュースで流れたことに間違いなく関連していることは、会話をしている彼女の対応を見ていればわかる。

「本部から連絡があった。E - c a t の人間がやられたらしい。犯人は望月で間違いはないが、手際良く殺した後すぐに身を潜めたように足取りをつかむことはできなかった」

手口はわざと姿を見せ、路地裏に引き込んでから手際よく殺害し去って行った。それが彼女の知る事実。それ以上の事は綾那にも組織にもわからなかった。

そして翌日も、翌々日も相次いで E - c a t の人間がやられた。月規市で警戒にあたっていた戦力の内、半数以上がわずか三日で削られることとなった。

そして綾那のもとに新たな指令が下りた。

「相次いで第二班、三班の人員がやられた。合計で九名になるが、この町の警戒に当たっていた人員の七割程度になる。そして新たに命令が下った。新倉君の護衛は解除、望月を可能な限り捕縛せよというこれまでの指令は、発見し次第始末せよとのことだ」

戦力のほとんどを削られた E - c a t はもはや狙われている人間を護衛するほどの余力などなかった。だから護衛優先を、望月の発見優先に転換したのだ。

そうなることは智之も覚悟していた。もちろん心の中では不安に

つぶされそうになっている。だがそれでも自分の命のためにこれ以上、犠牲を出し続ける方が堪える。

「そうか……。門原さんは残ってくれるって言ってるし、足が完治したんだからこれで憂いなく戦えるな」

なるべく強がつておいた。でなければまた馬鹿にされかねない。

ただ本心では、守ってほしいと言いたいところだ。

治療力が高いところで、バラバラにされてしまつては役に立たない。次に殺されるときは間違ひなく回復しないほど切り刻まれることを覚悟していたが、綾那、奏の二人がいたからその恐怖心に押しつぶされないでいた。

「門原さんは残ってくれるって言つし、逃げるくらいならなんとかなるよ」

精いっぱい強がり。それを無言で見詰める綾那だったが、ふつと軽い笑みを浮かべる。

「君は根性のない人間だと思つていたが、認識を改めよう。そして安心するがいい。私は君のもとを離れることにはならない」

思いもよらない展開だった。綾那は仲間と合流して望月の搜索に当たると思つていたからだ。

「命を懸けて君を守ると約束したからな。組織を言いくるめるのは多少骨が折れたが、君を囷として使う事を提言し続けたら何とか許可が出た」

「な、なるほど。囷役ね」

「そうだ。君は囷として奴を誘い出すために危ない橋を渡つてもらふことになる。一人で夜の街に繰り出し、指定する場所に誘い出してもらわなければならない。その覚悟はあるか？」

覚悟を問う綾那に、智之は力強く頷いた。

男として守られているだけでは名がすたるというもの。少しでも綾那の役に立つて見返してやりたいと兼ねてより思つていた強い気持が、負の方向に傾きかけた彼の心を持ち直させた。

「その目、覚悟は決まつていたようで愚問だったな。では明日から

こちらの指定する地区で君を泳がせ、奴をおびき出す。この作戦において肝に銘じてほしい事が二つある。一つは君の近くには私しかいないということ。奴に囷だと気取られてもいい、だが囷の周りに潜む狩人が近くにいないことさえわかれば奴は姿を現すからだ。そしてもう一つは、死ぬかもしれないという覚悟。私も全力をもって君を護衛する。だが私の力が及ばなかったときは逃げてほしい」

「わかった。だが二つ目の要求はのめない。絶対に奴を止めてくれると、俺は信じてる」

信じているとまで言われ、よりやる気が満ちてゆくのを感じる。

囷にされるという時点で常人ならば逃げ出すところだろう。まだあんなところに隠れるか、保護してもらえば安心はできる。だがそんな無粋なことはせず、綾那の気概と腕に命を懸けたのだ、鼓舞されないわけがない。

「一応、私もいるんですけどね……」

それまで取り残されてしまっていた奏が間を見てようやく口をはさむ。

「囷云々について私は何も言いません。私だって先輩を守る覚悟でいるんですから」

「忘れてなんかないよ。門原さんも常人離れた強さを持ってるんだ、心強い存在だよ」

常人離れというか、異能者なんですけどね。

そんなつまらない突っ込みでも、場の空気は一気に明るくなった。誰もが望月との対決に前向きに考えている何よりの証拠だろう。

——九人。あと五人くらいか。

月規市の商店街の一角。古めかしいアパートの中に潜伏しつつ、望月はずっとE・c・a・tの動向を監視していた。

「次こそは、仕留めてやるぞ」

身を返り血に染めながらも不敵な笑み。九人をなんとなく殺したことで自信は着いた。後は機を見計らうだけの状態。

手に持ったナイフを振り回し、今からでも殺したいと畳を何度も突き刺しつつ、対決の時を待った。

第三話 『同居と殺人』（後書き）

お久しぶりの更新になるんですかね。

最近仕事が忙しくてなかなか書けないという状況になってます。

今回の話では華やかな戦いのシーンは冒頭くらいしかありません。
状況の説明回だとも思ってください。

さて次回からは幽作戦決行。

智之の活躍は、望月の動向はいかに。

では次回も読んでくださいね^^

第四話 『囷と料理』

囷作戦を立てた翌日の夕方。智之は哲也を誘い出すため月規市の中心から少し外れたところにある繁華街を歩いていた。

趣味に特化した店やゲームセンター、パチンコ店などが立ち並ぶ一帯はいわゆる遊び場だ。普通は学校帰りに立ち寄ることを禁じられているのだが、私服に着替えて出歩くなどしている高校生もよく目にする。

こんなに人の多い場所で、人の目を避けている人間が殺人を犯すとは到底思えないような場所だった。

なぜこんな場所にいるのか。それは綾那の手にした情報からだった。地図上に殺人事件の起こった場所をマーキングしてみても共通性は見られず、しかも三十キロと広範囲にわたっているため E - c a t の人間を誘導しているのではないかという話も持ち上がった。

しかしとある隊員が気づく。三十キロという範囲を円で囲い、事件があつた翌々日には約十五キロ離れた場所で事件が起こっているという共通点。

そこで前々回に事件のあつた場所から、円を真つ二つにするようにして直線で結んだ場所。そしてそれが今回智之のいる繁華街という場所だ。

住処となるような空きテナントなんかは商店街に次いで多い。下手をすればこの繁華街に潜んでいる可能性もありうるのだ。

ところがだ、繁華街に現れるという組織の予測に言いようのない違和感を覚えてならなかった。それは綾那も同様で、どうも誘い込まれているような気がしてならない。

六日もあれば関連性には気付き始める。その関連性に気づき動いたところで、結局は哲也の掌で転がされているだけではないのだろうか、というのが綾那の思うところ。

しかしながら感じる違和感が何なのか特定できないというのも事

実なので、意見することなく組織の方針に従っている。

そんな状況で智之は誘惑に何度も負けそうになった。ゲームセクターやゲームショップが立ち並び、高校生にとっては欲望を掻きたてるには十分すぎる場所なのだ、立ち寄りたいと思うのが普通だろう。

ゲーム予約開始、新しい景品が入ったなど、ふらりと立ち寄ってしまいそうなのうたい文句が店の数だけ並んでいるのだから、彼の欲求に負けそうになる気分はわからなくもない。

ふらりと店に入りそうになったところで、「新倉君、寄り道をしている暇はないのだぞ？」とイヤホンから綾那のあきれたような声が聞こえてくる。

「わかってるよ。でも高校生の物欲にだけは理解してほしい」

咳をするふりをして声帯マイクから無線を送る。小型トランシーバーで連絡を取り合えるようにと渡されたが、入ってくる声といえは智之が欲求に負けられないよう叱責するものばかりで、哲也に関するものは一切入ってこない。

「望月とかいう奴の情報はいいのか？」

「今のところ奴の動向をつかんだといった情報は入っていない。君は引き続き繁華街を歩いてくれ」

そう言われてもただ歩いているだけではつまらない。せめて店に入って新作のゲームを見るくらいはいいんじゃないかなろうか。

またもや欲求に負けそうな事を考えていると、いかにもガラの悪い三人組が道路のど真ん中を堂々と歩いてくる。

絡まれたら面倒なことになることは目に見えている。避けようとした時に運悪く目があってしまい、三人組は智之の前に立ちはだかる。

「おまえ、いま俺らにガンくれやがったな」

金髪に耳や鼻にピアスをしている、いかにもヤンキーなリーダー格の男が絡んでくる。

「いや、そんなことはないですよ？　ただ店を見てただけで……」

内心、こんなときに勘弁してほしかった。周囲に騒がれたら面倒なことになるし、なにより哲也がいたとすれば逃げられてしまう可能性だってある。

智之に絡んできた男はほかの二人と目を合わせると、不敵な笑みを浮かべて智之を両脇に挟むようにして立つ。

「ちよい俺らにつきあってもらおうか」

「俺にそんな趣味は――」

ないと言いつ返そうとしたところで最後まで言わず、路地裏に連れ込まれた。

「よお、俺ら金欠なんだわ。ちよつとだけ投資してくれねえかな？
なあに、そのうち返すからよ」

返すという言葉はまずもって嘘だ。にやける三人組を見ていれば返す気が全くない事がわかる。

「俺も金はないんですよ。勘弁してください」

逃げようにも背後には壁しかなく、前には三人が立ちはだかっている。どう見ても脱出できるような状況ではなく、綾那が駆けつけてくれることを祈るしかない。

智之は発信機をつけられている。予定されていたルートから外れれば異常事態として駆けつけるという手筈はあらかじめ済ませておいた。

「ああ？ とりあえず有り金ぜんぶだしやあそれでいいんだよ！」
いよいよ殴りかかれそうな雰囲気醸し出しはじめる。これは

駆け付けるまでしばらくかかりそうだ。

「あ、そういえば……」

智之は思い出したように自分のズボンの後ろに手をやる。

「動かないで下さいよ？ 人なんて撃ちたくないんで」

財布を出すと思っていた男たちは目を剥いた。まさか拳銃を取り出してくると思っていなかったからだ。

しかしそれも一時の事。平和な日本でいかにも高校生である智之が、本物の拳銃を持っているとは到底考えられないという結論に至

ると笑った後、苛立たしげに路地脇のごみ箱を蹴り飛ばす。

「舐めてんのかてめえ！　んなおもちゃで脅そうたって無駄なんだよ！」

智之も少しは予測していたのだが、やはり見破られてしまうとうしようもなくなる。とは言えこんな所で本当に発砲するわけにもいかない。そこでふと、脇に転がる鉄パイプが目につく。

「すんません、マジ勘弁してください！」

智之はとりあえず土下座をして相手の様子を見る。三人はいら立ちを見せつけるように壁を蹴る。

「勘弁だと？　俺らを脅しといてよく言いやがるな！」

近づこうとする三人を上目で確認すると道脇に転がっていた鉄パイプを手に取り、剣道という正眼に構える。

「おもちゃの銃の次は鉄パイプってか？　俺らなめられてんなおい！」

喧嘩慣れしていない素人が、三人相手に鉄パイプを持ったところでなんら状況は変わらないと見たのか、一歩ずつ智之に近づいていく。

「胴オオオオ！」

先頭に立つガタイのいい男が一歩足を踏み出すと同時に、間合いに入ったと認識した智之はきれいな胴打ちを極めた。

脇腹を思い切り打たれた先頭の男は悶える様にその場に倒れ込んだ。どうやら意識を失ったらしい。

「突きいいいい！」

呆氣にとらわれている隙にもう一人、リーダー格ではない方のチャラチャラとした男の鳩尾に突きを極める。もちろん手加減はしているが、鉄パイプでの突きをまともに食らった相手は先程の男どうよう、もたえるように倒れ込み気を失う。

「て、てめえこのやるお！」

仲間が二人もやられれば、激昂するのは目に見えていた。だが懷からナイフを取り出すとは思ってもよらなかったため、智之は少した

じろぐ。だがここで倒さなければナイフの餌食になると考えると、自然と体が前に出ていた。

「小手えええええ！」

リーダー核の男がピクリと手を動かした時、一瞬で小手を極めてナイフを落とさせると後ろに抜け、振り向きざまに肩口から袈裟斬りの要領で鉄パイプを振り下ろす。

さすがにナイフ相手では手加減はできず、下手をすれば肩の骨ぐらいは折れてしまったかもしれない、改めて思うと智之の手は震えていた。

「だ、大丈夫か！」

駆け付けた綾那は呆気にとられる。三人を相手にして智之は無傷だったのだ、貧弱な高校生という認識を持っていた彼女からすればありえない光景だったに違いない。

「こ、これは、君がやったのか？」

動揺を隠せない声で質問をすると、智之は一度肯いて見せた。

「一応剣道やってたからさ、鉄パイプ見つけた時にやるしかないと思っ……」

声に覇気がない。人を傷つけてしまったのだ、智之は嫌な思い出がよみがえってきて気分が悪くなる。

「だが剣道をやっていたからと言って、無傷で済むとは思えない。喧嘩慣れでもしているのか？」

綾那の問いに、鋭いなと感心するとまた首を縦に振る。

「昔ちよつとな……。まあいい気分ではない」

「深くは聞かない。とりあえずこの件の処理は組織の方でうまくこまかしておく。だが望月がいたとするなら、この騒ぎには気付いているだろうな」

嘆息しつつ二人は路地裏を後にする。

表にはE・catの人間だと思われる二人が立ち、路地へ誰も入らないよう封鎖しているようだった。一般人はこの騒ぎに気づいていなかったらしい。

「一先ず今日は帰ろう。望月にも動きはないようだし、君も疲れただろう」

心遣いに一言詫びを入れると、二人は智之の部屋へ引き揚げた。

「おかえりなさい。ご飯できてますよ」

リビングのテーブルには奏がテレビを見ながら待っていた。手作りと思われる料理も並べられ、新聞紙が被されている。

「ただいま。腹減った……」

ゆつくりとテーブルに腰を下ろす智之を見て、奏は心配そうな顔を浮かべる。

「先輩、どうかしたんですか？」

「人を傷つけずに逃げるのは難しいと思ってな」

肩肘を尽きテレビを見ながら答える。

理由を綾那から聞いた奏は、少し唸ってから結論を出す。

「誰かを傷つけることなく生きるなんてできないですよ。精神的にも肉体的にも人は人を傷つけて生きてるんですから」

もっともな意見だとは思いますが、智之は人が傷つくことの辛さを、悲しむことの辛さを知っている。

「私は心が読めると言っただでしょう？ 路地裏で先輩は人を傷つけたくないと思っただ、それは本心です。同時に自分も傷つきたくないと思っただ、そして相手を傷つけることを選んだんです」

手厳しい言葉により智之の心が荒さんでいくのがわかった。

「俺は確かに自分を傷つけたくなかった。結局は自己中なんだよな」「いいえ、生き物は誰も傷つきたくない、痛い思いをしたくないと思うのが普通です。そして闘争本能のある限り、自分を傷つけないため相手を倒すというのが生物の常です」

異能者は特に闘争本能が高いと付け足し、仕方のない事だと言いつつ茶碗にご飯を盛ってゆく。

「新倉君、人を傷つけたくないと思うのは立派ではあるが、傷つけないければならない時もある。特に今回は相手から仕掛けてきたこと、

君が気に病むことなどない」

フォローを入れつつも差し出されたご飯に真っ先に手をつける綾那。それを見て奏は笑いをこらえる。

「やっぱり異能者ですね、人一倍おなががすくと見えて」

ぴたりと、ご飯を口に入れる前の姿勢で止まる綾那。その顔は心なしか赤い。

「い、いや、私は別に飢えてなどいない。門原さんのご飯がおいしいから箸が進むだけであって……」

そこで智之も何か思い出したように声を出す。

「そっぴや八隅さん、結構量を食うよな？」

その言葉と同時にテーブルに端をたたきつける音が響く。

「ち、違う！ これは異能者としての体質であって、私自身が大食漢というわけでは無い！」

完全に赤面し、結果として矛盾のある否定をする。

「まあ確かに異能者は常人よりエネルギーの消費量は多いですが、八隅さんの量はちょっと……」

二対一と完全に分が悪くなり、もう知らんと投げると思い切りご飯を口にかき込み始めた。

「結局食うのかよ……。そっぴや門原さんの飯は意外に結構うまいよな」

「意外にという言葉は余計ですよ。だてに一人暮らしはしていませんし、長く生きているといろんな技術がつくんです」

ほめられたことに気分を良くし、自分の唐揚げを智之のさらに一つ移す。

「なるほどね。ということは八隅さんも料理うまいのか？」

その問いに再び、ご飯を口に入れる直前の姿勢で固まる。

「あ、当たり前だ。自炊くらいでなければ生きてゆけないではないか！」

思い切り言い返されてしまった。そこまで必死になることないのとため息をつきつつ、智之はお礼にと奏にサラダを渡す。

「明日は是非八隅さんにご飯を作っていただきましょう。私も先輩も作ってるんですから、そろそろ料理を作ってもいいと思いますし」「いい提案だな。俺も八隅さんの手作り料理を食べてみたかったところだし」

期待に満ちた二人の目線から顔をそらし、少し口ごもってから綾那は任せておけと渋々ながら返事をする。

明日は憂鬱な一日になりそうな予感が、胸の中にふつつつとわきあがってゆくを感じ、深いため息をひとつ。

翌日も智之、奏は登校した。残された綾那は昨晚の問題解決に頭を悩ませる。

「なぜ、私はあんなに意地になってしまったのだ……。できないならできないと言えよかったではないか」

プライドなのか意地なのか、とにかくにもこうして頭を抱える事態にしてしまったのは自分以外の何者でもない。

料理をしたことは何度かあったが、どれほど努力をしてみても料理とはとても言えない代物しか作れたことがなかった。

一先ず昨晚買っておいた料理本を読んでいたのだが、料理の「さしすせそ」を初めて知ったところなのだから、先が思いやられる。

「さて、とりあえずおふくろの味とやらでも作ってみるか」
おふくろの味、肉じゃがの作り方というページを見ながら一通り材料を集めてみた。これまで挑戦した料理に比べれば量や手順は少ない。

「とりあえずジャガイモの皮むきを……」

包丁を手に皮をむき始めるが、刃を入れてはすぐに皮が切れ、また包丁を入れれば皮が切れる事を繰り返し、結果的にこぶし大のジャガイモが角張った親指ほどの大きさの、見るも無残な姿になってしまった。

「た、食べられれば問題はなかるう」

気を取り直して玉ねぎの皮をむいてゆく。だが一皮むくごとに目

から滝のように涙があふれてきた。だがどこまでむけばよいのか分からない綾那は辛さを必死にこらえて、結局ジャガイモと同じくらいの小さいものになり果てる。

「お、大きさがそろっているから、火の通りはいいはずだ……」

自分で自分を慰めるあたり、この現状は失敗への道を着実にたどっているということを理解しているらしい。

とはいえここで足踏みをしていても先には進めない。改めて料理本に目を移し、続きを読みながら手順どおりに調理を進めてゆく。

「——なぜ、こうなった……？」

煮込み始めてから中盤あたりで色合いがおかしくなり、終盤に近付いて肉じゃがの香りから程遠い刺激臭を発していた。

見るからに禍々しい色合いをしたソレを、なにはともあれできたのだからと一口含む。

ジャガイモだったものはほくほくとしてシャリシャリとしてガリガリと音を立てた。食感を味わい飲み込もうとするも、全く喉に入っていない。むしろ喉が、体が拒絶反応を起こしているようだった。

かろうじてそれを飲み込んでみたものの、続いてやってきたのは言いようのない気持ち悪さ。

「う、ウップ……！」

容姿端麗な彼女からは想像もつかない嗚咽を吐くと、すぐさまトイレに駆け込みすべてを吐きだした。

「はぁ……。なぜいつも私はこうなんだ」

自己嫌悪。手順通りに作ってもなぜかこうなってしまう。

途中で。もしかしたらそのせいで胃が持たれてしまったのかもしれないとも思える。

「このままでは、また冷やかされてしまうな……。とりあえず気分転換に出かけてみよう」

とは言ってみたものの、どこにも出かけるあては無い。

普段は哲也の動向調査のためにパソコンで情報をやり取りしたり、

潜んでいそうなところを調査したりをしていたのだが、気晴らしに出歩くことは綾那も久しぶりだった。

「さて、気分転換に来てはみたものの、どこにも行く予定がないというのもつまらないな」

ファッションに興味は薄く、娯楽品にも大して目がいけない。

一先ず本屋に入って料理本をよみあさるも、失敗した肉じゃがの作り方は間違っていないかつたはず。細かいところが少し違うくらいだと、何がいけなかったのか悩みこんでしまう。

次の本に手を伸ばそうとした時、横から別の手が現れる。

「おっと、これは失礼」

どうやら同じ本をとろうとしていたらしく、二つの手は同時に引かれた。

「え、えつと、あの……」

腰のあたりまである黒髪を振り乱しながら、混乱したように顔をそむけている女子生徒。

見覚えのある制服にふと奏の姿が重なる。

「君は、ふじみだいがくえん 藤観大学の制服？」

気付かれたことで取り乱した女子生徒は、一目散に本屋を後にする。

商店街を走り抜け、市街地を抜けて自宅の近くまで女子生徒は走った。

もともと体力は無い。途中休み休みではあったが、話しかけてきた人物が何か意図するところがあればすぐに追ってくるはずだと、切れた息を整え来た道を振り返る。

「追って、こない？」

ホッと胸をなでおろし、叱られることを覚悟でこのまま家に帰ろうと前を見たとき、本屋で出会った人物が目の前に立っていた。

「さて、なぜ必死になって逃げたのか、まずは教えていただけませんか？」

突然逃げた女子生徒に対し、何かの事件に関係しているのではな

いかと綾那は疑心を抱いて後を追おうとした。

しかし所詮は一般人の足、気付かれないように隠れながらも十分に追うことができた。

「ご、ごめんなさい……。ごめんなさい……」

そんな綾那に驚いてか女子生徒は急に謝りだし、涙を流してその場でしゃがみこんでしまう。

「何を謝ることがある。まずは走りだした訳を話してもらえばいい」

優しい綾那の声に、自分を責めたてようとしないことを安堵すると、目に涙をため女子生徒は顔を上げる。

「その、私学校を休んでしまつて。それであんなところにいたから何かされるのではないかと……」

おびえている表情から、それ以外裏がなさそうだと察すると、綾那はほほえみを向けた。

「何か訳があつたんだろう？ 見ず知らずの私でよければ話を聞く、そういつて差し出した手を女子生徒は恐る恐る握り立ち上がった。近場の公園に移動するとベンチに女子生徒を座らせ、自動販売機で買ってきたジュースの缶を手渡す。

「あ、ありがとうございます」

「さて、どうしてあれほどおびえたのか、教えてもらってもいいかな？」

自分のジュースに口をつけながら、穏やかな口調で綾那は話を切り出した。

「実は私、学校が好きじゃないんです。誰とも話すことはないし、勉強は嫌いじゃないですけどほかの人が騒いでますし……」

「それで抜け出したか、学校を休んであんなところにいたと。ではなぜ制服のままでいるんです？」

「校門までいつてから、学校に行きたくないと思つてしまつて。それで行くあてもなく歩いていたら商店街に足が向いていて。お願いします、今日学校に来なかつたことを誰にも言わないでください！」

告げ口をしようと思ったのか、必死に学校を無断で休んだことを黙っていてほしいと懇願する。

「私は別にかまわない。だが連絡は学校から行くのではないのか？」
「先生もわかつているんです、私が学校に来ないことを。それがもう日常だから、親にも連絡しようとしません。だから貴女が言わなければ……」

「それほど親御さんに知られたくないのか？」

綾那の返した質問に少し口をつぐんで、知られば容赦なくたたかれること、罵詈雑言を浴びせられること、いわゆる行き過ぎた折檻をつけることになるかと告白する。

「それが嫌であるなら、相談所なりに行けばいい。何も自分の中で押し殺すことも無かるう」

だが女子生徒は首を横に振った。一度訴えたことはあつたが、彼女には過度にヒステリーを起こす癖が小さい事があり、それを理由にうまくごまかされてきたというのだ。

「私には味方なんていないんです。多分この先も、私をかばってくれる人なんていない。貴女もただ暇つぶしに私を相手にしているだけですよ？」

瞳を濡らし、手に持つジュースの缶を握り締める。

女子生徒は老いこまれてしまっていると理解すると軽く手を叩いて綾那は立ち上がった。

「君、料理はできるか？」

何の脈絡もない質問に呆氣にとられながら、少しならと控えめに返答してうなづく。

「なら家に来て料理を教えちゃいけないか？ 私が料理をする事を決められてしまったのだが、どうしてもうまくいかないんだ。どうだろう、行くあてがないのなら協力いただけるとありがたい。それに、君も出歩くよりは危険が少ないであろう」

料理を教えてほしいという口実はともかく、かくまってもらえるという申し出はありがたい話だ。

「は、はいわかりました！」

いい返事だと笑顔を向け、その笑顔を見た女子生徒はまるで優しい母親を連想させ、感じていた不安など消えてゆくを感じた。

「そういえば自己紹介がまだであつたな。私の名前は八隅綾那という。君は？」

「私は江藤夕希えとう ゆきといいます。」

簡単に自己紹介を済ませ、二人は智之の部屋に戻る。

部屋に帰った綾那は、遠慮がちに上がる女子生徒をリビングに連れてゆくと、椅子に座らせてお茶を出す。

「本当は私の家ではないのだから、今日だけは目をつむってもらおう」

遠慮がちにいう綾那に、小鳥のようにキョロキョロと部屋の内装を見てから夕希は目を向ける。

「そうなんですか。ところでどうして私に料理を聞こうと？」

どうしようもなく歩いていた夕希にとって、身を隠せる場所に連れてきてもらったことはありがたかった。

だが見ず知らずで、しかも料理が教えてほしいというだけのこと
で身を隠すことに協力するなど、裏があるとは思えない。

「なに、料理ができる人間に指導を頂いた方がわかりやすいという
もの。それに悩み思いつめている人を救うことも好きなことなので
な」

綾那はお茶を一含みすると、改めて学校に行きたくない理由を問
う。学校で何かあつたのか、と。

「……実は私、みんなから軽蔑されているんです」

「軽蔑、とはまた何とも。いじめられているという理由だと思つた
のだが」

「いえ、特に何か危害を加えられるというわけではないんです。た
だみんな私が居ないようにふるまっているんです。私にかかわりた
くないということなのだと思います。やはり小さな嫌がらせはたま

にされますけど、本当に誰も私とかかわろつとしない……」

その原因を問うと夕希は口ごもって一言、異能者だからと答えた。再びお茶を一含み、綾那は深いため息をついた。

「確かに今の世では、異能者など畏怖の存在でしかない。自分たちにはできないようなことができる、おかしな能力を持っているという点でな。だから話さず、近づかず、関わらずという態度をとる。危害を加えられたくないだろうからな」

「まるで異能者の事をよくご存じのようですね？」

異能者が社会的にどういう扱いを受けているのか、まるで自分の事のように話す綾那にもしやという予感がした。

「察しの通り、私も異能者でね。よく厄介がられたものだ」

異能者だと告げた途端、夕希はこれまでこわばっていた表情を崩した。異能者だと告白した時は追い出されてしまうのではないかという不安に駆られたが、理解があるどころか異能者同士という事に言いようのない安心感が胸を満たした。

「もうひとつ言うと、私は厚生労働省の異能者厚生課に勤務している。つまり、異能者の味方も味方、社会的に救済しようという組織にいるわけだ」

その後綾那は、異能者の生活の仕方、社会に出ってから異能力が役に立っていることなどを語る。

話の一言一句に耳を傾け、それらを聞いていく毎に憂鬱の色を浮かべていた夕希の瞳に希望の光が差し始めた。

話が終わってから綾那の念願であった料理の時間となり、智之たちが帰ってくるであろう時間の直前まで肉じゃがについて夕希から熱心な指導を受けた。

「今日は本当にありがとうございました。八隅さんのお話を聞けて救われた気がします」

「そうか、それは良かった。こちらこそ料理を教えてくれてありがとう。まるで見違える様であった」

最後に作った肉じゃがは本当に至極の逸品と言っていていいほどの出

来栄えだつた。香り、味、見た目、どれをとつても料亭のそれに引けを取らない。

「私は料理が好きで、だからこれだけ人に教えるということが楽しい事だとは思いませんでした。あ、あと肉じゃがに重曹は入れませんからね？」

調理をするうえで一番驚いたのがそれだった。あく抜きのために重曹を入れると思つていた綾那は、自身に雷が落ちたかのような衝撃を受けてしまった。

「う、うむ。応用はもつと基礎がわかってからにすると学んだ」

恥ずかしげに頬を染めながらも、出会つたときの雰囲気と変わった夕希を見て内心安堵した。

「私の無駄話でよければ、また聞きに来てくれ。君の役に立てれば幸いだ」

「無駄なお話なんてありませんでした。私も嫌なことがあつたらお話しするかもしれませんが、よろしくお願いします」

夕希は深深と一礼すると、マンションを後にした。

「うまつ！ なんじゃこりや。まさか料亭から取り寄せたんじゃあ……」

「天変地異でも起こるんでしょうか……。八隅さんは料理の『り』の字も知らなかったはず」

出された肉じゃがを食した二人は口々に驚きの言葉を発している。もちろん昨晩の話と奏の心を読む能力で料理の腕前がかなりひどいという予想をしていただけに、衝撃を受けるほど想定外の出来事。「決して料亭から取り寄せたわけではない、私を侮るな。と言いたところだが、実のところを言えば料理は苦手だ。昨日は強がつてしまったが、いまこうして肉じゃがができたことも奇跡としか言いようがない」

「そりゃまあ、うまいもんができたのは何よりだけどさ……。なんで今日は肉じゃががしかないんだ？」

智之が疑問を抱くのも無理からぬことだ。ご飯もみそ汁も何もない、ただ小さな四角の器に盛られた肉じゃがだけが食卓を飾っている。よもや肉じゃがも、おかずの主役を通りこして一品だけ上がるとは思っていなかっただろう。

「確かにおいしいですが、肉じゃがだけではおなが満たされないような……」

「心配するな！ 肉じゃがならまだ鍋にたくさんある」

このまま行けば腹は満たされるが、満足度としては相当低いものになりそうだった。

と、その時リビングに不思議な音が流れる。

コミカルで気の抜けたような音の主は綾那の持つ携帯電話。とても彼女の性格からは思いの寄らない着信音だっただけに、智之はさらに彩那への認識を改めた。

「な、なんだと！ それは誠であろうな！」

先程まで肉じゃがの出来栄えに顔を緩ませていた彩那の表情が一変、引き締まった。

「了解した。こちらでも警戒態勢をとる」

携帯電話を切ると、綾那は二人に向き直る。

そんな雰囲気を感じてか、先程まで和やかだった空気は一気に静かなものへと変わった。

「今しがた、組織の人員四名が殺害されたそうだ。手口から見ても望月であろう」

昨日は殺人事件が起こらなかった。だから四人というのも昨日殺す予定であった人数を後出しにしたということだ。

「一先ずここには現れないだろうということだ。すぐに身を隠したらしいからな。だが今回の手口はかなり派手だったらしい。二人とも警戒してほしい」

突然の凶報に智之も奏も口を開こうとしない。部屋にはただ、いまだ調理中の肉じゃがをゆでる音だけがこだましていた。

第四話 『囧と料理』（後書き）

以前から読んでいただいる、お方久しぶりです。初めて読まれた方はじめまして！

最近は一〇時過ぎまで残業が続き、さすがに疲れが；

というわけで少しの戦闘シーンと日常シーンです。

どうも僕は日常シーンが苦手らしく、戦闘と違って書きたいことがあまり浮かばないので、なかなかうまくまとまらなかった感じがあります（+ | +）

というわけでこれからは日常にドキドキわくわくのシーンを入れてゆきたいと思いますので、ぜひとも次回にご期待ください。

第五話 『遭遇と巻添え』

昼休み、智之は食事もとらず考えことに耽っていた。

四名の E - cat 隊員が殺害されたのは智之が囷として歩いていた繁華街の路地裏。しかも三人組に襲われた場所と同一あったという。

もともと智之の一件が無ければ囷をしていた日に同じ路地で犯行に及んだのだろうか。おまけに今回も手口は変わらず誘い込んで犯行に及んでいる。

「もしかしたら俺を襲うつつもりだったのか……？」

殺害された隊員の警戒経路と囷として歩いた経路がまったく同じだったことから考えてみれば、哲也はその付近に張り込んでいたに違いはなかった。だから不良グループに絡まれるという事件が無ければ襲われていたのは智之だったかもしれない。

心に浮かぶ、襲われなかったことへの安堵と囷として機能できたかもしれないという悔しさ。

「つつても、俺が襲われてから八隅さんが来るまでのタイムラグを考えれば、俺が何とかできるわけないか……」

己の非力さに嘆息すると、机に伏せる。

綾那には考えなくてもいいといわれているが、こうして関わっている以上考えないことは不可能なわけで。

「はあ……。どうしたもんかな」

深いため息をつき顔を上げると、憎らしいほどの笑顔が目飛び込んできた。

「いよう！ どうした朝っぱらからブルーじゃねえの」

智之の事情など知らない栄太はいつもの調子で声をかける。

その能天気さを智之はうらやましいと思ってしまふあたり、やはり普通の生活に戻りたいという気持ちはみじんも衰えていないよう

だ。

「お前は相変わらずバカっぽいな」

「んな！ ついに直接バカと言いやがったな！」

そこで智之は少し考えて、真剣なまなざしを栄太に向ける。

「すまん、間違えた。お前は相変わらずバカだ」

「言い換えてまで断言すんな！」

必死の言い返しも今の智之には上の空。そんなどうでもいい事を言い合う暇はない。

「ところでお前、二年の奴とつきあってんの？」

無関心でいようとしたのに無理だった。

「んなわけあるか！」

吠えた。心の底から吠えたくった。

これからどうやって哲也の居場所を突き止めようとか、接触したときの対応について考えようとしていたのに、その一言で考えが頭から吹き飛んでしまった。

「いやだって、お前朝からその二年……、門原だっけ？ と登校してるとこ見られてるし」

確かに朝は一緒に登校している、というよりも登校せざるを得ない状況にある。

襲われる可能性はゼロに近いとはいえ、警護という名目で学校まで同行することを渋々許可しているのだ。

そんな事情を栄太に暴露するわけにはいかない。

「そ、そりゃ一回助けたらなんか付きまとうようになったって…

…」

「ふーん、それにしちゃあ仲よさそうだったぜ？」

「見てやがったのか……」

今後は一緒に登校しない様に言わなければ。

「つきあってんだろ？ とりあえず殺らせろ」

「おまえ、なんかやらせるの意味わからんしニュアンスが違っような」

気にするなと言いながら、栄太は智之の背後にまわろうとする。

これから何をしようとしているか、付き合いからおおよその行動パターンを読み取って背後を取らせまいとする。

「とつとと死ねやあ！」

どこかで聞いたことがあったセリフだがそこは無視するとして、死ねと軽々しく口にするあたり、智之の癪に障る。

「死ねとか簡単に言ってるじゃねえぞ！」

さすがに智之も本気で組合にかかる。だが栄太はいまだ遊びの域を脱していない。このままでは本気の喧嘩になりかねないところまで来ていた。

「失礼します。……先輩、何やってるんですか？」

そこに間がいいのか悪いのか、現れたのは取っ組み合いの原因となった奏その人。二人の絡みを見て少し引いているようだ。

「門原さん、ちょっと待ってくれ。このドアホをなんとか組伏せてやるから」

押しつ押されつの組合が続きそうだと感じた奏は、二人の間に弁当箱を差し出す。

「先輩、今日は私のお弁当なんですから、一緒に食べに行きましょう」

奏のセリフを聞いたとたん、栄太の力は抜けて膝から崩れ落ちた。「弁当……、手作りの弁当……。すまん智之、もうお前らの間に割って入る勇気がねえ」

最初から割って入るなと言いたところだが、とにかくにも状況はこれで収束した。

放心状態で魂が抜けかけているような栄太は放っておいて、二人はそそくさと屋上に移動した。

「はい先輩、あーん」

差し出してきた卵焼きを、口に入れまいと必死に抵抗する。

ただでさえ周りから勘違いをされているのだ、これ以上の事をされては身が持たないというもの。

「いって。それより、望月の動きをどう見てるんだ？」

その質問に不機嫌そうに奏は箸を引っ込めると、無粋ですねとほを膨らませて抗議する。

「E-catが動向はつかめていないのに、私がどうやって見つけられるはずないじゃないですか。あくまで予測ということであれば、犯行のあった繁華街か、駅前商店街あたりに潜んでいるのではないですか？」

智之が食べてくれなかった卵焼きをおいしいのにと少しかじる。

「お前の心を読む能力とやらで何とかならないのか？」

「私の能力はこうして面と向かっている状態でなければ使えません。それに多数の人数が集まる場所で、一人の心を読もうというのは無理なのです」

奏の能力は自分の脳波と相手の脳波を同調させて感情を読み取り、さらに詮索して何が言いたいのかを読み取るもの。

多数の人間が集まる場所で使用しようものなら複数の脳波を拾い、奏自身が制御しきれなくなるということだ。

「なんか異能者の能力つてのも複雑なんだな」

「確かに解析をすれば複雑な事も単純なこともわかります。ただこういった能力ができるその原理自体、解析できないというのが現状ではあります」

どうやっても哲也を能力で搜索することは難しいという話で落ち着くと、奏は苦笑を浮かべて屋上に出るドアに目を向ける。

「あの方、ずっと見てますね」

智之も気づいてはいたが、ずっと気にしないよう努力していた。だが奏はどうしても気になるようだ。

「ああ、放っておけ。どうせそのうち消える」

血涙を流しながら二人の様子を見つめる栄太少年。

先の卵焼きのやり取りでは血を吐きそうになったほど、二人のやり取りに言いようのない悔しさと怒りがまじりあったものが込みあがってくるのを感じた。嫉妬心の芽生えである。

「でも、多分あの方も一緒に食事をとりたいたいのではないですか？」
奏の言ったことが聞こえたのか、栄太は激しく首を上下させている。

「あいつはもう飯を食ったはずだ。無視しよう」
がつくりと栄太は膝をついた。

「でもお弁当のおかずならまだ結構ありますし」
再び希望が宿ったかのように、混ざりたいという視線を向けてくる栄太。

「……まあ、門原さんがいいのなら——」
その言葉を聞いた瞬間、全力で二人の前に立つ栄太少年。その表情は満足だと言わんばかりに疎ましい笑顔だった。

「桜庭栄太！ 身長百１７１センチ体重六十九キロ。趣味はスポーツ全般と読書。夜露死苦！」

さすがの奏も突然の自己紹介にドン引きしている。

「えっと……、門原奏です。二年生です」
どう対応していいのか分からず、智之に助けてほしいような視線を向ける。

一方栄太はといえば女子に話しかけられたことに無量の喜びを感じているようだ。

「補足しとくと、バカでバカでバカな俺にとってはただのお知り合いだ。基本無視でいい」

「バカバカ連呼すんじゃないやねえ！ お前も馬鹿になるぞ？」

低レベルすぎる反応に、「ほらな」と智之はあきれた顔を見せる。
「ところで、お二人はどういったご関係で？」

おそらく、いや間違いなくそういう関係だと栄太は勘繰っていたが、もしもという可能性に懸けて質問してみる。

「以前危なかったところを新倉先輩に助けていただいたんです。それで少しでも恩返しできればと、こうしてお弁当を作ってきたりしています」

「いよっしやああああ！」

栄太少年、一八年の人生で一番のガッツポーズだった。

まだ可能性は残っているとわかると、ふてぶてしくも奏の隣に座り猛アピールを仕掛ける。

「趣味とか何やってるの？ 普段はやっぱ女友達と一緒にかな？ 好きな人とか居ないの？」

鬱陶しいほどの質問にたじろぎながらも、律儀に奏は答えてあげる。

冷静そうな奏でもこんなに動揺するんだなと新鮮な景色を眺める智之は、一切救いの手を差し伸べる気はなさそうだ。

さすがにいら立ちが高ぶり始めたのか、奏の額に青筋が浮かんだ。「えっと、先輩ですけどすみません。キモイです」

ついに奏が怒りをあらわにする。

その一言で栄太の弾丸トークは一気に静かになり、まるでフリーズドライをかけられたかのように固まってしまった。

「やれやれ、我が知り合いながらキモイ奴だった……」

智之が締めくくると固まったままの栄太を放っておいて、二人でさっさと屋上を後にする。

夕方は再び囧として、智之は海岸沿いを歩く。

これも前々回に事件のあった場所から約十五キロ離れた場所に当たる。もちろん夕方の浜辺に人がいるわけもなく、かといって見通しが良すぎて繁華街とは反対の意味で襲にくい場所。

「新倉君、今回はわざと囧らしく歩いてもらう。堂々と歩き奴をおびき寄せてくれ。何かあれば一先ず銃を撃てばいい」

無線から入ってくる綾那の声に小声で応答すると、ベルトの間に挟んだ拳銃を確認する。

まるでハードボイルドアニメのキャラクターみたいだ、などと思いつながら夕方の涼しくなった潮風を浴びる。

まばらではあるが帰宅する人も垣間見える中、どう見渡しても哲也が隠れていそうな場所は見当たらない。本当に開けていてもし現

れるとしたら堤防から道を挟んだ市街地くらいなものだ。

「本当に現れるのかな……？」

そんなことを思っていていつも指定された経路を巡回する。

気付けばすっかり日も落ち、帰宅する人間も見えなくなっていたころ、智之はいい加減歩き疲れて堤防に座り込み海を眺めていた。

月が海に映り、波の加減で暈ほかされる様は朧月にも見えて、何とも風流。こんなことで感慨を受けるとは、やはり自分も日本人なんだろうなと、ふと道の方に目をやる。

そこに不自然なまでに街灯の下に立つ人影に目が行った。

まるで誰かを待ち伏せているかのようなその姿に、智之は忘れられない人物の姿と記憶を合致させる。

「望月……」

つぶやくとその人影も、待ってましたと言わんばかりに智之へ向きなおり、見覚えのある大物のナイフを鞘から抜き放つ。

「いよう、久しいな」

本当に囷として機能したのか、それとも先を読まれていたのか、答えはもちろん後者だと、智之は理解した。

「待ち伏せてたのか、ここに来ることを知ってた」

「つたりめえだろ。中々どうして、気付くまで時間がかかったと思っただが、まあいい。とりあえず今日で決着つけとこうぜ。どうせあの女もいることだろうしな、さっさと終わらせてやるよ」

哲也がナイフを構えるのと同時に、智之も腰のベルトからガンマンのごとく銃を抜く。

「ほう、様になってんじゃねえか。んでも、当てられなきゃ意味ねえけどな」

智之は空いた時間に綾那から銃の構え方を教わったし、射撃の訓練もした。だが的に当てることはまだ難しい。

二メートル程度であれば智之でも当てられる、だが相手は異能者。難なくかわして見せるに違いなかった。

それなら――

「うおっ！ いきなりかよ！」

近距離に持ち込んでもおそろく撃つ前にやられる。その前にけん制しておいてさっさと背を見せ逃走する。

「チッ、撃つという逃げるかよ。だがまあいい。その余興、乗ってやるよ」

異能者といっても能力は個々によつてさまざまで、以前出会ったときから智之の足は常人と変わらないことを知っている哲也は、二メートルほどの距離を保ちつつ智之を追撃する。

「さてさておにごっこだ！ 逃げろよ坊主！」

いつでも殺れるという余裕を見せつつ、一定の距離を保ち追いかける哲也。

一方智之も無策に走っているわけではない。とりあえず市街地に逃げ込んでしまえば地形は複雑で、時間稼ぎはできるだろうという算段だった。

もちろんそんなことは哲也も承知だがあ、えてその誘いに乗ることも一興と、複雑に入り組む市街地に入ってゆく。

すでに午後九時を回っており、出歩く人影はない。それに細い路地を抜けているとなおさら人目が無い、襲うには好都合な場所だ。

しかし哲也は理解しがたい智之の行動に頭をひねっていた。

「逃げるんなら大通りに出るはずだ。なんであえて細い路地に入りやがった？」

何かに誘い込んでいるとしか思えないが、意図する深いところが理解できない。

この先に綾那が待ち伏せているのか、はたまたE・catの面々がおそろいして感激してくれるのか、などと考えていると智之はT字路を右折。哲也も素早く右折する、だが――

「うくっ……！」

乾いた破裂音と同時に哲也は素早く曲がったT字路に後退し角に身を隠す。

右折した瞬間に智之が銃を構えているのを見て、その場で止まれ

ば間違いなく撃たれると察知し、とつさに後退したのだ。

そして再び智之の走りだす足音がすると、哲也も追撃を再開する。

「な、なんてこった……」

Ｔ字路を曲がった先にあつたのは閑静な住宅街。だが先程の銃声で多く外を窓から注視する人や、家から出て何事かと驚いている人々。

これが智之の考えていた作戦だった。

銃声がすれば必ず住民は騒ぎを聞き視線を大通りに向ける。こうして哲也の追撃を振り切ろうという算段だった。

追いつかれるという予測をしなかつたのは若気の至りではあるだろうが、結果的には目論見がうまくこと当たる結果となる。

「八隅さん、望月は今宇侶町（うろまち）の住宅街で一番の大通りにいる。人が集まってるからすぐに見つかるはずだ」

「了解した。君は今どうしている？」

「人ごみにまぎれて裏路地に逃げた。奴は多分退散するかもしれねえ——」

後は綾那が到着するまで逃げ回ればいい、だがその考えも甘かつたことにすぐ気付かされた。

「ずいぶん、舐めたことするじゃねえの？」

撒いたと思っていた。だが目の前に仁王立ちする男は紛れもない、哲也だった。

「どうしてここに……！」

「詰めが甘めえよ。人目を集めたつてのに、裏路地に逃げ込む馬鹿がいるとはよ」

目算が甘かつたとしか言いようがなかった。騒ぎが起きれば必ず哲也は逃げだすとはかり思い込んだ事は完全に失態だ。

「くそっ！　こうなりやどこまでも逃げてやる」

悪態をつくと同時に智之は発砲しつつ、路地裏のさらに奥へと逃げてゆく。

「いい加減あきたんだよボケ！　死にさらせ！」

いくら撃とうが哲也はいともたやすくよけつつ追撃をする。表情は怒りにゆがめ、一気に間合いを詰めてゆく。

駄目だ、そう思いつつも滑り込むように交差点を曲がる。だが目の前に現れる人影に急ブレーキをかけた。

黒髪で幼い顔立ち、籐観大学園の制服を着ているその人影に驚き動きが止まる。その背後にはすでに迫いついた哲也がナイフを月光に煌めかせていた。

哲也は人を目撃されたことに渋い顔を見せている。

「……ツチ！ いかにも襲ってますってところを見られちゃった。ということは、そいつも道連れだな！」

凶悪なナイフの切っ先を向け、一直線に二人へと迫る。

智之は哲也に背を向ける形で女子生徒の前に立つ、その顔は刺されようとしているのに女子生徒を安心させるようにと不格好な頬笑みを浮かべていた。

ズブリと、智之の背に深深とささるナイフ。その長さで哲也の勢いで腹部まで完全に貫通してしまう。

「——ツツ！」

二度と体感することはないと思っていた激痛、刺された衝撃で背にそりかえる体、そして胃を貫かれたのか激しい嗚咽とともに口から湧き出す鮮血。

「——新倉君！」

位置を特定した綾那は襲いかかっている哲也に渾身の一撃、だが時すでに遅かったことを智之の状態を見て理解すると、まさに腸が煮えかえるほど憤怒した。

「貴様よくもおおお！」

哲也は刺した瞬間、すぐさまナイフを抜き放ち退散するつもりだった。女子生徒は後で始末すればいいと考えていたのだが、智之を刺した時の異和感に気を取られて反応が遅れ、完全に逃げるタイミングを逃してしまった。

華麗な剣さばきを見せたとは思えぬ、怒りに身を焼き哲也を一刀

で斬り裂いてやろうというほどの鬼気を刀に宿しながら放つ一撃は、襲いかかる凶刃を受け流そうとするナイフをもはじく。

ここで引こうものなら、綾那はその刹那に哲也を切り捨ててしまう。それをわかつている哲也は引くに引けず、一振りが重く速いその剣撃から迂闊に斬り込むこともできない。

このままでは間違いなく押し切られると思ったその時。

「いやあああああ！」

それまで混乱していた女子生徒の頭が状況を理解し、そして恐怖と、目の前で鮮血を多量に流す智之を見て悲鳴を上げた。

綾那もその悲鳴に一瞬気を取られるが、哲也にとってその間は逃走するのに十分すぎた。

塀に飛び乗りそのまま裏側へと飛び降りる哲也を、綾那は追うことができない。負傷どころか瀕死の重傷を負った智之から離れるわけにはいかなかったからだ。

「そんな、私のせいで……」

うろたえ脅える女子生徒を、かろうじて平常心を保ちつつなだめようとして、綾那はその人物に見覚えがあることに気がつく。

「君は、確か江藤さんだったな。大丈夫、大丈夫だから落ち着こう」
優しく夕希を抱きしめた。

やはり体が震えている、余ほど怖かったのがわかる。

「さて、少し待っていてくれ。この少年も死にはしないだろうから心配はしなくていい、彼も異能者だからな」

死にはしないだろうというのは落ち着かせようとするための方便で、綾那も内心智之の命が危ういと焦っていた。

だが焦ったところで傷がふさがるわけではない、何かで止血しなければと智之に駆け寄るが、そこで奇妙な光景を目にした。

「これは、どういうことなんだ……！」

仰向けに倒れている智之の、腹部に貫通したと思われるナイフの傷を抑えようとしたが、傷口が見当たらなかった。

確かに哲也を引き離した後で智之の状態を見たときは、背中から腹部から大出血を起こしていたのだ。だが今その出血を起こしていた傷口は見当たらない。

「不可解だが、とりあえず病院に連れて行かねば。君も一緒に……」
再び夕希に向き直った時には、彼女も気を失っていた。それも当然かと思いつつ E - c a t に連絡し、二人は病院へ搬送されることとなった。

闇い、闇い、どこまでも続いてそうだ。

どこまでも闇が支配する世界にたたずむ智之は、今自分がどうしてこんなところにいるのか理解できない。

「確か女の子をかばって、そして背中から刺されたんだ」

自分の腹部に手を当ててみるが全く出血していない。しかし生きている心地もしない。

「おれ、死んだのかな……」

働かない頭でもそんなことだけは思える。

「死んでもらっては困る。君はまだやるべきことがあるんだからね」
智之のつぶやきに対して呼応するかのようになり、どこからともなく女性の声がしたかと思うとその世界とは間逆の温かい光が世界を包み、目の前が真っ白になった――

「ん……、ここは？」

智之はゆっくりと上体を起こす。

見渡してみればいつか見たときと同じ内装の部屋。少ししてから霞掛っていた意識が戻り始め、病院だと認識した。

「目が覚めたか。正直、もうだめかと思った」

声のする方を見れば温かい笑みを浮かべる綾那が椅子に座っていた。

目がさめるまでの間彼女はずっと付き添い、眠ることさえしなかっただけに智之が目覚めたことに心から安堵した。

「俺は確か、望月に刺されてそれから……」

自らの腹部に手を当ててみるが縫われた後は無い。それどころか痛みすら感じていなかった。

「君の回復力には本当に驚かされる。刺されてからわずか十分足らずで傷がふさがってしまふなど、私も初めてみた」

それほどまでに自分の体は異常なのだろう。

そう思うと複雑だった。本当に自分が自分でないような感覚にさえとらわれてしまふ。

「俺は生きてるんだよな？ ああ、あの傷で……」

「ああ……。新倉君、申し訳なかった。私が駆け付けるのが遅れたばかりにまた君を傷つけて……」

深々と頭を下げ涙声で謝罪する綾那に智之は少し驚くと、不意に意地悪をしたくなってしまった。

「本当だぜ。生きてるからよかったものの、もつと早く来てくれりゃあこんな痛い思いもしなかったのに」

正直言えば痛かったのは刺された瞬間だけ。それ以後は意識を失ってしまったって恐怖感も何もあつたものではなかった。

「す、すまない！ 私にできることなら何でもする！」

目に涙を浮かべる綾那を見て胸が高鳴る。

気丈で凜としたイメージだっただけに、こうしてしおらしくなってしまうとは新鮮味を覚えるわけで。

「あ、ま、なんだな。生きてるからまあいいけど……」

あまりにかわいらしい綾那に動揺し、必死に謝るその姿を見てからかおうとしたことが逆に申し訳なくなってしまう。

「いや、そういうわけにはいかない！ 私の気が済むまで離れないぞ！」

「そ、それは勘弁してくれ。とりあえず大事がないんらとつとと家に帰りてえ」

病院にはいい思い出がないからこそ、早く自宅に帰りたいかった。そんなわけで二日ぶりに自宅へ戻った智之であったが、住人の数

が明らかにおかしいことに気づかないほど鈍感ではない。

「この状況は何なんだよ、え？ とりあえず順を追って説明してもらおうか」

ひきつった笑顔を綾那に向けると、気まずそうに顔をそらされた。

「なんというかその……。成り行き、でな？」

「全然説明になってねえ！ 誰だあの子は！」

智之の指差す先には突然現れた彼に驚きつつ、手にはしっかりと奏特製のそうめんを持っている夕希がいた。

「えっと、退院おめでとうございます？」

思い浮かぶ言葉がなかったのか、夕希が第一声に発したのはそんな素っ頓狂な言葉だった。

第五話 『遭遇と巻添え』（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。

思いのほか早く書けちゃいましたw

まあ一話あたりワードで42文字×34行の10ページ程度なんで、アイディアが思いつけば割と早く書けてしまう不思議

さていよいよ主人公の能力が開花してまいりました。といっても治癒能力が高いというだけの話ではありますがw

ちなみに8話くらいでひとくりにしようかなと思ってるんで、すでに終盤なんですねこれがw

なんてのんびりしてるんだろうと思うでしょうが、まあそこは気にせず次回に期待していただければ幸いですw

ではまたこの次もよろしく願いいたしますm(_____)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9274w/>

死んだ少年は死ねない

2011年10月19日00時16分発行